



JCIC-Heritage

第5回 文化遺産国際協力コンソーシアム シンポジウム 報告書

文化遺産保護は平和の礎をつくる

2010年

文化遺産国際協力コンソーシアム

文化遺産国際協力コンソーシアム 国際シンポジウム 報告書

Report on Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage International Symposium

文化遺産保護は いしずえ 平和の礎をつくる

Peace-making through the Conservation of Cultural Heritage
Challenges for Future

日時： 2010年5月20日(火) 13:00 - 17:00

場所： 国連大学ウ・タント国際会議場

主催： 文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁、外務省

後援： (独)国立文化財機構東京文化財研究所、(独)国立文化財機構奈良文化財研究所、(独)国際協力機構、(独)国際交流基金、(財)住友財団、(財)トヨタ財団、(財)三菱財団、(独)文化財保護・芸術研究助成財団、(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所、(社)日本ユネスコ協会連盟、日本イコモス国内委員会、NHK、朝日新聞社、読売新聞社、東京新聞社

「私が、こうした遺跡や文化財を我々の手で後世に残さなくてはならないと考えたのも、絵のテーマと同様、平和な世界を望む気持ちから生まれたものです。歴史の生きた証人である遺跡や文化財を守ることは、平和の象徴にほかなりません」(『平山郁夫・日本画のこころー私が絵画から学んだこと』(講談社カルチャーブックス)講談社、1995年)

.....

序文

.....

2006年6月に公布された「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」により、海外の文化遺産保護に係る国際協力について国や教育研究機関の果たすべき責務や関係機関の連携の強化などの国が講ずべき施策が定められました。同時に、文化遺産保護の国際協力の持続的発展に寄与するため、協調的・連携的な国際協力のための共通基盤を確立することを目指して、文化遺産国際協力コンソーシアムが設立されました。日本画家であり世界の文化遺産保護を積極的によびかけてきた平山郁夫先生は、その初代会長を務められました。

文化遺産国際協力コンソーシアムでは、より多くの人々に文化遺産国際協力について関心をもっていただくことを目的として、年に一度国際シンポジウムを開催しており、本シンポジウムで第5回目をむかえます。これまでのシンポジウムでは、人材育成や観光など、文化遺産国際協力に関わる様々なテーマをあつかってきました。本年度は、初代会長平山郁夫先生の功績を振り返り、平和構築と文化遺産保護に取り組んでいらした平山先生の精神を受け継ぐ道を模索するものとして開催されました。

第一部は、平山先生の足跡をたどるということで、平山先生と関係が深い3名の先生から講演いただきました。続いて第二部は、パネルディスカッションとして、「文化遺産保護と平和構築」をテーマに、第一線で活躍される4名の先生方に討議いただきました。本報告書は、これら講演、討議をまとめたものです。

平山先生は、「戦争の苦しみから生まれる芸術は、泥沼に咲く蓮の花だ」と、芸術を泥の中からきれいな花を咲かせる蓮に例えました。苦しみのなかから生まれた芸術を護り、次代に伝えていくため、文化遺産国際協力コンソーシアムは今後も、平山先生の精神を継ぎ、文化遺産保護を通じた国際協力を推進していきます。

最後に、平山郁夫先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

.....
目次
.....

序文

目次

- 1 . プログラム P. 07
- 2 . 挨拶 P. 11
- ・石澤良昭 (上智大学学長・文化遺産国際協力コンソーシアム会長)
 - ・海外からのメッセージ
- 3 . 第一部：講演 P. 17
- 「文化遺産と平和への祈りー平山郁夫の足跡ー」
- ・ジャック・ジエス (フランス独立行政法人 ギメ東洋美術館 館長)
 - ・樊 錦詩 (中国敦煌研究院 院長)
 - ・宮田亮平 (東京藝術大学 学長)
- 4 . 第二部：パネルディスカッション P. 31
- 「文化遺産と平和構築」

.....

プログラム

.....

12:00 ~	開場
13:00 ~ 13:10	NHK「平山郁夫特集」上映
13:10 ~ 13:30	開会挨拶： 玉井日出夫（文化庁長官） 門司健次郎（外務省大臣官房広報文化交流部長） 石澤良昭（文化遺産国際協力コンソーシアム会長）
13:30 ~ 13:40	メッセージ朗読： ICCROM 代表・財団代表
13:40 ~ 14:40	【第一部：講演】 「文化遺産と平和への祈り 平山郁夫の足跡」 ジャック・ジエス（フランス独立行政法人ギメ東洋美術館館長） 樊 錦詩（中国敦煌研究院院長） 宮田亮平（東京藝術大学学長）
14:40 ~ 14:55	休憩（15分）
14:55 ~ 16:45	【第二部：パネルディスカッション】 「文化遺産保護と平和構築」 パネリスト 石澤良昭（上智大学学長） 前田耕作（和光大学名誉教授） 星野俊也（大阪大学大学院教授） 大石芳野（写真家・日本大学客員教授） 司会 青木繁夫（サイバー大学教授）
16:45 ~ 16:50	閉会の辞：清水真一（東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター長）

* 肩書きはシンポジウム開催当時のものです。

挨拶

石澤良昭

(上智大学学長・文化遺産国際協力コンソーシアム会長)

海外からのメッセージ

(イクロム事務局)



ご挨拶

石澤良昭 (上智大学学長・文化遺産国際協力コンソーシアム会長)

本日は沢山の皆様にご出席いただきまして、ありがとうございます。まずは、コンソーシアムを代表して故平山郁夫先生のみたまに心からのご冥福をお祈り申しあげ、ここに平山先生のご業績を追悼申しあげ、国際シンポジウムの開催をご報告申しあげます。また、私ども一同は本日ここに参集いたし、平山精神の継承を宣言いたします。

まず先生が生前お書きになったお言葉を読み上げさせていただきます。

「私 (平山先生) がシルクロードの地に足を踏み入れてから、もう 40 年余の歳月が過ぎているが、彼の地でまのあたりにした遺跡は、歴史そのものの証人であった。1978 年に「大唐西域壁画」制作にあたって、中国の新疆ウイグル自治区のトルファン盆地にある高昌故城を訪れたときのことである。私は希有な体験をした。629 年、国禁を犯してインドへと求法の旅に出た玄奘三蔵は、高昌国 (Kao-ch'ang) を訪れている。時の国王鞠文泰 (qu-wén-tai)(623-640) は玄奘を手厚くもてなし、この国で仏法を広めるよう望んだという。しかし、玄奘の求法の意味は堅く、インドへの旅は続けられた。高昌国を玄奘が去るにあたって、鞠文泰は旅の費用を布施し、従者もつけたという。あまつさえ、王は途中の国々の王にも紹介状を書き、玄奘を送り出した。鞠文泰の経済的支援で玄奘のインドへの旅は成功したといわれている。この恩に報いるために玄奘は帰国の折は、高昌国に 3 年間とどまって仏法を説くことを約束した。しかし、17 年に及んだインドでの修行を終え、帰国をまえにして玄奘の耳に達した報は高昌国の滅亡だった。シルクロードは名もない人が踏み固めた道だった。それは生活上必要な道であり、人々はその当時の貿易のために炎熱の地を横切って旅をした。その旅が文化の交流に役立つなどとは、彼等は思ってもみなかったであろう。しかし、結果的には彼等によって、文化も東から西へ、西から東へ運ばれたのだ。シルクロードは、その優雅な響きとは異なり、厳しい道である。死の恐怖を乗り越えてシルクロードを旅する彼等にとって、国境や言葉の違いや民族、人種の違いなどはまったく問題にならなかったに違いない。その意味では彼等はまさしく国際人であった。この道は、平和という大きな問題を私に突きつけることとなった。何度もシルクロードに立つ機会を重ねるうちに、私は世界平和を願う気持ちを強く持つようになっている。古代からシルクロードで展開されてきた人々の交流こそ、現代世界に平和をもたらす規範ではなかったか」(『ペルガモンとシルクロード』中近東文化センター、2008 年)

というふうなお話でございます。引き続き、2010 年 2/3/4 号『トンボの眼』に掲載された対談から平山先生のお言葉をご紹介します。

「『文化財赤十字構想』とは、第一次世界大戦中、傷ついた兵士を敵味方の区別なく救った「国際赤十字」と同じ精神です。私が長年にわたって踏破してきたユーラシア大陸の東西文化交流の舞台には、さまざまな民族が、誇りと精神性と美意識を傾注して創出し、今に伝える質の高い文化の文化財と文化遺産が数多くあります。しかしその多くが自然の脅威と、戦乱や盗みなど人為的破壊にさらされ、崩壊の危機に瀕しています。パーミヤーンの大石仏のように、一度破壊されれば、二度と同じものは生まれません。優れた文化財は継承されることによって生き続けるのです。それは古くなくても美しいのです。その「美」を赤十字の心で救済することは、国境や民族、宗教の壁を乗り越えて急務なのです。〈略〉とはいえ時代の使命感というべきものがあります。玄奘三蔵は真の仏法を伝えようと、インドまで旅をし、帰国後も仏典の翻訳に生涯をかけました。この無私の精神が、後に後継者を生み、多大な影響を与え、海を隔て日本

の仏教普及にも貢献しました。私は歩んできた道にいくつかの種をまいてきたのです。必ず育ってくれるものと信じています。〈略〉この遺跡にたずさわった建築家や彫刻家、あるいは画家といった人々はどんな人だったのだろうか、と思いました。遺跡は民族の興亡の舞台で、壮大な歴史のドラマの象徴です。しかし国破れ、時を経て、造られた時代の文明と歴史と文化を伝える生きた資料でもあります。そして遺跡は、自然のなすがままに崩れ、やがては土に返ってしまいます。世界にある多くの遺跡は戦争や自然災害、開発、盗掘などで危機に瀕しています。遺跡は様々な歴史のロマンを私たちに語りかけてくれます。この人類共通の歴史遺産を守ることは、大いに意義あることです。それぞれに時代に、それぞれの遺跡にたずさわった人々の努力と情熱を次代に伝えること、それが今を生きる私たちの責務だと、信じて疑いません。」(『トンボの眼』2/3/4号、2010年)

以上のように、平山先生は語っておられます。ここに平山先生のお言葉をお伝えし、本日の国際シンポジウムの意義と原点が、平山先生にあったことを出席の皆様にお伝えしたかったわけでございます。本日は平山美知子様もご出席いただいております。私ども、平山先生の足跡を辿ると同時に、平山先生の後に続く道を探ってまいりたいと思っております。平山先生を追悼すると同時に、先生の精神を私たちが継承しようという試みです。長くなりましたがご清聴ありがとうございました。



シンポジウム「文化遺産保護は平和の礎をつくる」によせて

ムニール・ブシュナキ (イクロム事務局長) : 代読 石澤良昭

本シンポジウムにお集まりになっている平山先生のご同僚やご友人とご一緒できないことを非常に残念に思っています。しかし、友人であり、上智大学学長である石澤良昭先生が私のメッセージを代読してくださるということに感謝をし、メッセージをお送りします。

尊敬する参加者の皆さん、私は1989年、当時ユネスコ事務局長であったフェデリコ・マヨール氏が平山先生をユネスコ親善大使に任命した年に、平山先生に初めてお会いしました。当時、私は人類の文化遺産を保護するための任務に就いておりました。平山先生はそのユネスコのプログラムにすぐに興味をお持ちになり、それからずっと連絡を取り合っていました。

1990年代初め、第1次湾岸戦争の後に、平山先生はクウェートとイラクの住民への被害に心を痛み、両国の芸術作品の略奪を心配してらっしゃいました。数年後、カンボジア内戦終結をもたらしたパリ和平協定の後、アンコール地域のクメール文化遺産を保護するための国際協力が始まった1993年の東京会議が開催されると、平山先生は、カンボジア王国の動産文化遺産の密売に反対するキャンペーンを全力でサポートしてくださいました。彼の素晴らしい作品を用いながら世論を盛り上げ、ユネスコによる現地の若手カンボジア人に対する文化遺産特別講義に積極的に参加して下さったのです。また、熱い情熱を持ってアフガニスタンの深刻な状況に警告を発し、世界各地で違法に輸出されている仏教作品をアフガニスタンに返還するための基金集めに奔走してくださいました。

その多忙さにかかわらず、平山先生は、パリやワシントンで行われるユネスコの重要な会議には必ず出席してください、紛争や戦争により被害を受けた国々の復興のための緊急的活動を支援に努めていらっしゃいました。

彼の哲学はご自身が広島の実験者であったという劇的な過去によるものであり、彼は「文化遺産のための赤十字精神」を促進したひとりでもあります。

2001年、2003年は、平山先生にとって非常に辛い時期であったと思います。2001年3月にバーミヤーンの仏像が破壊され、2003年3月にはバグダッド国立博物館が略奪行為にあったのです。この困難な時代、われわれは当時のユネスコ事務局長である松浦氏とともに平山先生をお招きし、対話の促進や平和的協力の精神を強化することにより、それら「文化的大惨事」に対応する方法や手段に関して論議しました。

ユネスコの文化局副局長時代、私は光栄にも平山先生が日本で主催された行事に何回もお招きいただきました。その中で特に印象に残っているのは、1つは東京国立博物館で行われたシルクロードに関する展覧会とセミナー、もうひとつは、奈良の東大寺で開催された「シルクロードと仏教文化」に関するセミナーです。

ユネスコにいる我々、特に私にとっての平山先生とは、師匠であり、かつ理想でもありました。文化や芸術の普遍的価値を認める平山先生の情熱的な訴えは、文化遺産保護に挑む全ての人々への訓示であり、平和と対話へむかう道しるべとして人々の心のなかに残っていくことでしょう。

ありがとうございました。

第一部

講演

「文化遺産と平和への祈り 平山郁夫の足跡」

ジャック・ジエス

(フランス独立行政法人ギメ東洋美術館館長)

樊 錦詩

(中国敦煌研究院院長)

宮田亮平

(東京藝術大学学長)



平山郁夫とギメ東洋美術館

ジャック・ジエス (フランス独立行政法人 ギメ東洋美術館館長)

このたびは、文化遺産国際協力コンソーシアムが、我々の偉大なる友人平山郁夫先生のために、このシンポジウムを開催してくださいましたことに、まず御礼を申し上げます。そして、このような場で、先生の具体的な活動についてお話できることを名誉に思っております。また、パリのギメ美術館での平山先生の活動、それから我々の取り組みに対する平山先生の御貢献についてお話できることを嬉しく思っております。

最初に、個人的なお話をさせて下さい。個人的に平山先生と初めてお会いした時は、とても特殊な状況のなかでございました。私は、1983年に開催された敦煌の芸術学院でのシンポジウムに講演者として参加しておりました。何日も何日も私達参加者は会議室の中に、閉じこもって会議しておりました。その一連のシンポジウムが終わった後、私どもは石窟を訪問しました。石窟のうちの一つに入った時、一人の人物、ある画家をみたのです。一人で立ってらっしゃいました。そして、ちょうどそこで、その方は彼が目の前にみているもの、つまり壁画をスケッチしていらしたのです。私は、いったいこの素晴らしい男性、この画家のしていることはどういうことなのかと思いました。また一方、この画家が一人でここに居られたなんてことはなんと幸運なことであろうと思いました。我々は、部屋にこもって芸術について語っていたのに、彼は現場で芸術を実践していたわけです。なんと大きな違いがあるかと思いました。つまり、我々は美術史家あるいは芸術史家として仕事をしていたわけでありますが、一方で、一人でそのような取り組みを行っている芸術家、自分の存在すべてをかけて絵を描いている人がいたわけです。その時そこで出会った方こそ、日本の代表的な画家である平山郁夫先生でした。

その後、まもなくパリでお会いする機会がありました。そこで改めて本当に平山郁夫先生の素晴らしいお人柄に触れることができました。静かで落ち着いた方でいらっしゃいました。先生には仏教の経典に伝えられているような静けさというものがあり、そして何かがお顔から輝いているようでありました。これまでもお話がありましたが、常に平山先生は平和を追求していらっしゃいました。この静けさ、そして人柄からにじみ出る光、これが先生のすべての行動にも反映されていたと思います。

1963年に、平山先生は若いユネスコの奨学生としてフランスにお越しになりました。つまり、フランスが平山先生の日本国外での最初のステップだったといえるでしょう。そして、これはフランス・ギメ美術館と平山先生の交流に続きます。東京でギメ美術館のエミール・ギメ・コレクションの仏像の展覧会がありましたが、私の前任でありますジャン＝フランソワ・ジャリージュ館長が、その際、平山先生の鎌倉のアトリエを訪れました。そして、パリで平山先生のシルクロード展を行ってはどうかという提案をしたわけです。

私は、平山先生と私どもの美術館の創設者エミール・ギメとの間に類似点があ



写真 1. ジャック・ジエス館長



写真 2. ギメ東洋美術館
(撮影：尾本圭子)

るような気がします。ギメも、東洋美術にすべてを捧げた人です。大きな図書館なども設置しました。このエミール・ギメは、美術館を様々な思想や宗教の場、人々とその慣習、文化的な慣習との間の交流や理解の場とすることを望みました。そうして集められたエミール・ギメの日本の仏像のコレクションが1989年に、東京で展示されたのでした。その折に、先ほどもうしましたように当時のジャリージュ館長が平山先生にギメ美術館で先生の作品の展示をしないかとの提案をしたのでした。



写真 3. 中央アジア室



写真 4. スケッチをする平山郁夫氏
(撮影：尾本圭子、2001年1月
ギメ美術館において)

その後、ギメ美術館は5年かけて改修工事を行いました。平山先生は、この大きな改修工事についての情報を得られ、改修工事に対して多くの財政支援をして下さいました。現在の中央アジア室はそのような経緯で改修されたのです。ですので、この部屋を「平山郁夫室」というように呼んでおります。この改修により、この部屋は素晴らしく生まれ変わりました。この部屋は、まさしく平山先生の精神を表していると思います。というのは、この部屋は、私どもの美術館の中で、唯一三つの文明が会う部屋であるのです。いわゆる「セリンディア」といわれる中国とインド、それにアフガニスタンの三つの文明が会う場です。この部屋では、いかにシルクロードが豊かであったかを理解することができ、それを体感できます。来館者は、ガンダーラから出発し、敦煌までを旅することができます。そしてその先に中国の仏教美術が展示されてあるのです。まさにシルクロードがテーマの展示であります。平和というテーマがその背後に控えているといえるでしょう。ギメ美術館改修完了時には、当時のフランスの大統領、ジャック・シラクによってオープニングセレモニーが行われました。平山先生、そして秋山光和先生もこのセレモニーに出席されておられます。その際、平山先生は、1922年にアルフレッド・フーシェがガンダーラ地方で発掘調査をして、ギメ美術館にもたらした有名な菩薩像をはじめとする様々な展示品を見て、深く感動されておられました。

平山先生という偉大な友人は、いろいろなご支援をして下さいました。ギメ美術館にとっては非常に貴重な方で、関係の深い方でありました。平和というのが常に平山先生の精神の中にはありました。人類の歴史の背後には、この平和というものが絶対必要であると主張されていきました。過去の文明から平和の重要性というものを理解し、それをギメ美術館という場において、寛大な心、相互理解というものが重要であるということを表示なさいました。当然そこには、平山先生の学術的なそして芸術的な分析力というものがあったと思います。平山先生においては知識というものは、常に新しいものに活用されなくてはならない、ということ。確かに平山先生の知識というものは、新しい発見のために役立っていたと思います。宗教についての新しい知識、文化についての知識、そういうものが過去の知識を基にしてさらに蓄積されていくというお考えでありました。彼の知識は彼の頭の中だけにとどまるのではなく、外にでて様々な形で開花していきました。我々が、はたして平山先生の期待に応えることができるかどうかです。ギメ美術館は東洋の美術を中心としたヨーロッパの代表的な美術館ではありますが、平山先生のような日本画の非常にすぐれた芸術家が満足していただけるような内容であるかどうか心がけなくてはなりません。平山先生は、一本の筆から非常に純粋な美というものを表現される日本画家です。奈良・京都・飛鳥などでみられる日本美術の持っている純粋さというものの、その純粋さを平山先生は御自身の絵



筆を通じて表現されていかれたわけです。石澤先生もいわれましたように、平山先生は、いろいろな知識というものを一本の筆の中に集約させて、それを御自身の日本画の中に表現していかれました。それが、決して難しく理解しがたいような手法ではなく、わかりやすい手法でなされたことについて、本当に感動しております。最後に、この場をかりて、平山先生に深く御礼申し上げたいと思います。



写真 5. 平山夫妻とジエス館長親子
(撮影：仙波志郎、2009年ギメ美術館において)



平山郁夫と敦煌

樊 錦詩 (中国敦煌研究院院長)

皆様、心がなかなか穏やかになれませんが、それでもこのシンポジウムに参加させていただいて光栄です。2009年の12月2日、平山先生は輝かしい人生の旅を終えられました。平山先生は中国、そして敦煌と本当に深いご縁を結ばれました。そして先生は敦煌の保護のために不休の貢献をされました。先生の生誕80周年を迎えるにあたり、ここに深く先生のご冥福をお祈りいたします。

平山先生は少年時代、第二次世界大戦という苦しい経験をしていらっしゃいます。そして先生は生と死の間をさまよったこともあるのです。こうした戦争の体験から、先生は生涯、平和主義を貫かれました。美をもって人類の良識を感化しようとしたし、絵画で人類の平和を祈ったのです。また、文化交流による平和促進を提唱され、文化遺産の保護を通じて平和を構築しようと試みました。平和を求め、芸術を愛した平山先生は、若いころから、仏教や仏教芸術が、東西文化交流の絆として大きな役割を果たしたということに着目していました。そして唐代の僧、三蔵法師を人生の手本としまして、シルクロードにそって日本の美と、日本の文化の源を探し求めることをその理想としました。1958年の1月、敦煌研究院は東京で中国敦煌芸術展というのを開いたのですが、平山先生はその場で日本の文化と敦煌の繋がりが深いということを敏感に見出したのです。こうして敦煌は平山先生にとって本当に永年の夢、あこがれの場となったのであります。

しかし色々な歴史的な理由から、平山先生は1979年になって初めて敦煌を訪れることとなりました。私今でもはっきり覚えていますけれども、当時平山先生は漠高窟の本当に簡素な小屋に寝泊りされ、労をいとわず、あらゆる時間、朝から晩まで使って、洞窟を一つ一つ無我夢中で鑑賞してまわられました。そして先生は敦煌芸術の宝庫を堪能しますと、世界的名作が敦煌に揃っている、と述べられました。また、敦煌の芸術は時代を超えて、国境を超えてあらゆる人間の価値観を超えていると称賛されました。あの時の忘れ難き敦煌の旅、これは先生にとって永年の願いを叶えた旅でしたけれども、また同時に、それは敦煌に対する先生の新たな認識を深める旅でもありました。こうして先生と敦煌との切っても切れない縁が結ばれたわけであります。

平山先生は敦煌石窟の良き理解者であったわけです。平山先生はその後も、本当に数多くの回数、敦煌を訪れまして、そして、その度に必ず洞窟を鑑賞され飽きることを知りませんでした。また、平山先生はよく絵筆で、自分で感じたことを描き残していらっしゃいました。敦煌を題材にした数々の秀作を生み、その芸術人生においても、一つ一つ高峰を極められたわけです。

平山先生は、東京藝術大学の教授や学長をお勤めの時代に、日本画科の学生には必ず敦煌で実習をさせる、ということなさいました。そして敦煌芸術の素晴らしさを学生達に吸収させたのです。こうして日本ひいては世界に敦煌芸術の価値を広め、本当に多大な貢献をされました。これが、1987年先生が漠高窟の中で



写真1. 樊錦詩院長



図1.



図2.



図 3.



図 4.

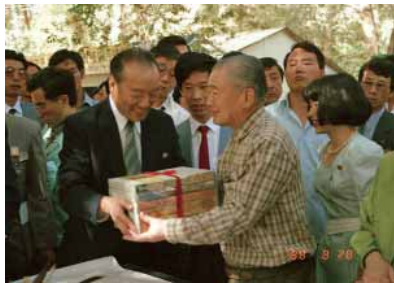


図 5.



図 6.



図 7.



図 8.

見学をして、スケッチをしている写真です(図1)。これは2007年8月に先生が漠高窟で写生をしてられる写真です(図2)。

また平山先生は敦煌石窟の保護に本当に尽くされた方でした。敦煌芸術を愛した平山先生は、敦煌石窟を保護することの重要性、そして緊急性を認識されました。敦煌の文化遺産の保護研究事業に役立ちたいとの思いに駆られたのでしょ、これを先生は崇高な使命とし、敦煌という仏教芸術の聖地を守るために尽力されました。先生のご尽力のもと、1980年代の中頃から敦煌研究院と日本の東京国立文化財研究所は共に敦煌石窟の科学的保護・研究活動を共同で行うこととなりました。これまでに20年を数えるわけですが、双方の科学者・研究者は漠高窟で長期的にモニタリングをおこない、窟内の環境や壁画に残る病害との関係、病害の発生原因、壁画における病害の予防策につままして、長年に渡って共に研究を続けてきました。そして、多くの成果も生まれました。

こうして、敦煌研究院の(石窟)保護のレベルは、おおいに向上いたしました。この写真は2006年に敦煌研究院と東京文化財研究所が第5期中日協力の協議書を調印した時の調印式の時の写真です(図3)。こちらは敦煌研究院と東京文化財研究所が漠高窟(の中の)一番有名な285窟で壁画に対し、光学的調査を行っている時の写真です(図4)。また先生は日本の政治家にも繰り返し、文化遺産である漠高窟を保護することの重要性を説明しました。先生は敦煌研究院前院長の段文傑先生と共に中曽根元首相を訪ねることもありました。1988年には、当時の竹下登首相の敦煌訪問に平山先生は同行されました。そして最終的には、日本政府から敦煌石窟保護・研究陳列センターの建設の中国側への無償援助がされました。このセンターの建設中も先生はたびたび敦煌漠高窟を訪れまして、場所はどこにするのか、あるいは設計、施工などはどうするのかということに関わられました。1994年にセンターは完成しておりますが、その際再び竹下登元首相と共に先生は落成式に出席されています。このセンターは建築そのものも美しく、機能や陳列の素晴らしさから、古い歴史ある敦煌において、新しい観光スポットにもなっております。センターは漠高窟の保護と展示の面で大いに力を発揮しておりまして、中日友好の歴史における一里塚となっております。これは1988年8月、竹下元首相が初めて漠高窟を訪問した時の写真です(図5)。こちらは1994年平山先生のご尽力で出来た敦煌石窟の陳列センターのオープニング時にテープカットをしていらっしゃいます(図6)。こちらは日本政府の無償援助による敦煌保護研究陳列センターの外観の写真です(図7)。

また、先生は日本の国民に対しましても是非ともこういった遺産の保護に注目するよう、関心を高めるためにも尽力しました。多くの人に声をかけ、敦煌の見学や視察を勧め、多くの日本の国民の憧れや関心を高めました。また1988年に日本文化財保護振興財団の設立を提唱し、民間にも働きかけ、赤十字の精神を持って、人類にとって重要な文化遺産を救おうと呼びかけました。私達の敦煌石窟はこの活動から裨益?した文化遺産です。財団から敦煌研究院には本当に価値のある多くの書籍や機器、科学研究に必要な設備など寄贈されました。また漠高窟の地域、給水施設の建設資金が提供されるなど、敦煌研究院の研究や環境改善に大いに役立ちました。これは財団設立当初のメンバーの方々が、漠高窟を見学していらっしゃる時の写真です(図8)。1988年です。財団から私ども敦煌研究院に寄贈され



た線の分析機器です。

そして平山先生は我々敦煌研究院にとって本当に真摯なる友人でありました。先生のご尽力や推進のもと、文化財保護研究助成財団、野村国際文化財団、鹿島美術振興財団などから助成をうけまして、1985年から東京藝術大学美術学部の保存修復東洋美術史日本画科などの研究室は敦煌研究院のために25年間にわたって、文物保護、美術、敦煌学などの専門家要請の為に、40人の研修員を受け入れてくださいました。私達敦煌研究院のハイレベルな人材育成に協力して下さいました。この写真は1991年5月、東京芸術大学がリ・サイユウさん、我々の研究院の者ですが、博士号の学位が送られた時の写真であります(図9)。中国で初めて文物保護に関する最初の博士号を取得したのは、リさんです。

また、特に私が感動したのは、1989年に先生は個展で得た収入である2億円を全額敦煌研究院に寄贈されました。そして敦煌石窟の保護研究を助成されたわけです。研究院はこれをもとに、平山郁夫敦煌学術基金をつくりました。後にこれをベースにして、更に拡大をし、中国敦煌石窟保護研究基金会を作りました。私達研究院は平山先生の基金のもとで敦煌学国際学術会議を開催し、専門家の海外訪問、派遣、交流事業というのを行いました。また学術書の出版や科学研究に必要な設備を購入したり、文化遺産保護施設を建設しました。こうした基金は敦煌文物保護研究の発展に大いなる役割をはたしました。こちらの写真はその後平山先生の基金をもとに作った中国敦煌石窟保護研究基金会の理事会のもようの写真です(図10)。

こちらは平山先生の基金が全身となる敦煌石窟保護研究基金会の方で、敦煌学の授賞式を行っている時の写真です(図11)。

平山先生は実は我が研究院の名誉研究院でもありまして、長年にわたって敦煌の文化と芸術の発揚に務められました。しかし先生は驕ることなく、常に親しみを持って人々に接し、敦煌研究院の多くの職員とも深い友情を育まれました。敦煌研究院にとって先生は異国の友人でありますけれども、ある意味で私達の同僚でした。敦煌の文化遺産の保護研究事業にかけた先生の多大な功績に感謝をし、記念するために1994年、敦煌研究院は漠高窟に記念の鐘を作りました。そびえ立つ九層の楼は平山先生が敦煌石窟に注いだ心血を永久に見守るでありましょし、古の名サザンは平山先生が敦煌石窟に傾けた愛情を永遠に記憶し続けるでしょう。これがその1994年に作った平山先生の記念の碑であります(図12)。右側が碑文です。

そして2007年平山先生は喜寿を迎えられました。私はそのために日本にお祝いにまいりました。そして先生に、是非その年の8月に中国の甘肅省政府と国家文物局が開催する段文傑先生の敦煌文物芸術保護研究60周年記念行事にお越しく下さいと招請しました。段文傑院長は平山先生と長年親交のあるお友達であったわけですから。平山先生はこの招請を快諾し、奥様と共に蘭州と敦煌を訪れられました。そして多くの場で大変感動的なスピーチをされまして、改めて漠高窟に先生の足跡を残されたわけですから。これは先生の喜寿の時に私達が誕生のお祝をしてさし上げました(図13)。先生がケーキを切っていらっしゃいます。



図 9.



図 10.



図 11.



図 12.



図 13.



図 14.

こちらは平山先生が出席された段文傑先生の敦煌文物芸術保護研究賞の授賞式であります。真ん中が平山先生と段文傑先生が親しく懇談をしている写真です(図 14)。

こちらは平山先生がその時の敦煌壁画芸術継承国際学術シンポジウムで、報告をされている時の写真です(図 15)。



図 15.

2007年8月平山郁夫平山先生は敦煌壁画芸術継承創作美術作品展を見学していらっしゃる時の写真です(図 16)。

こちらは最後に漠高窟で残された写真です。背後に写っているのが漠高窟です(図 17)。

2年が過ぎました。敦煌の保護の事業は新たな成果を収めました。おそらく先生も喜んでくださっていると思います。平山先生生誕80年になるわけですが、敦煌の石窟を愛し、心を配り続けた先生を追憶し、そして偉大な貢献を永遠に明記し、御恩に感謝したいと思います。私は平山先生が切り開かれた中日協力による敦煌保護の行動、そして先生が自ら培った日本の各界と敦煌研究院との友好は世代を超えて受け継がれていき、やがて中日友好と世界平和と言う大海原にやがて流れ着くものと私は信じております。以上です。ありがとうございました。



図 16.



図 17.



消しゴムを使わない人生

宮田亮平 (東京藝術大学学長)



写真 1. 宮田亮平学長

宮田でございます。2人の先生の素晴らしいご講演の後、どのようなことをお話すれば良いか迷っております。私は、現在東京藝術大学に所属させてもらっておりますので、東京藝術大学と平山先生という切り口でお話させていただきます。

私の学生時代、平山先生はバリバリの助教授でございました。お会いするのは夜中と朝だけでございました。夜遅い時間に、ある飲み屋さんでお会いした時のことです。先生は、学生を連れていらっしゃる、私は、私の恩師であります山下恒雄先生と一緒にのところでお会いしました。夜の芸術談義がまた実に見事でございます、お酒が入ると、とても素敵でございました。(いま、奥様が昔のことは根堀、葉堀とい

うのはいかがなものかという顔でジロツと見られましたが)とても素敵でございました。そして、切り口がよかったですね。まず学生をよく見る。先ほどの映像にもございましたけれども、スケッチをする時に子供たちに美しく、美しいものを感じて、それを表現すればいいんだよ、というようなことをおっしゃっていたように、先生は決して学生の未熟な部分は切り込むということをなさいませんでした。もう一つ素敵なのは、先生は学生が自分でこれはいいと思っているものに対しても切り込まなかったことです。また、学生の磨かれてない、原石の部分、目を磨くこと、レンズを磨くことへの導きの素敵さというのが、大変素晴らしかったように記憶しております。

それらを学校の中で、アトリエの中で、そして違った切り口で夜中にお話し下さいました。で、ふと気づくと午前1時、2時、先生はさっといっしょらなくなる。私ども、電車はありません。上野近辺で飲んでおりましたから、トボトボと学校へ戻るわけです。門は閉まっている。教室も閉まっている。なので、堀を乗り越え学生食堂、大浦という食堂があるので、その前の外のベンチで朝までぐずぐずしているわけです。その食堂の朝の味噌汁が旨いんです。朝だけシジミの香りがする美味しい味噌汁。お昼のシジミのみそ汁は貝殻しかございませんのであまりお勤めはしません(笑)。なぜみそ汁の話をしたかと言うと、その味噌汁が当時私どもの二日酔い解消法だったんですが、その効果が出る前に、平山先生は昨日とは全く違うスーツで、ピシッとなさって学校にいっしょっていました。学校の門を入ったところの守衛所の横に、名前を書いた木の札があるんです。それがパチンと裏返されます。これがいい音がるんです。年季が入った先生の木の札ほど手垢で黒くなっていて、ほとんど字がわからなくなっている。よく学校にきちっと来て下さる先生ほど、名札がよく見えない。あまり来ない、それから新参者っていうのはよく見えるんですけど、平山先生の札は本当に見えませんでした。また、必ず光っているんですね。そして私どもの前を、軽く会釈をして昨日何があったのかな?、という感じですよーっと通り過ぎて行く。それまで、例のみそ汁を飲んでぼやーとしていたところに、先生が、スーツと前を通られる。私どもも思わず緊張して、よし、頑張ろう、またアトリエに入って作品を作ろう、という雰囲気になりました。そんな、先生と私どもの出会いがございました。

先生を語る時に感じるひとつの大きな衝撃的なことは、私どもの大学が法人化した時に、2度学長になって頂いた時のことです。特に二期目の時に、先生は大変大きな決断をされました。それは全教員に任期制を適用させることです。自分が自分の中できちとした評価をするということを先行して、どこの大学もできないことをやろう、とおっしゃっていただきました。私は当時学部長でございましたが、正直焦りました。なにしろ国家公務員でしたから、永久就職に、どこかで甘えがありました。一生懸命やっているつもりでしたが、その一番の人間力を高めるための方法として、何を、といった時に先生は全教員を任期制にしよう、とおっしゃったのです。その際、学部長から先生にご指名を頂き、副学長にさせていただきました。先生から学ばせて頂くことが数多くありました。その時に実に驚いたことがございますが、一期目ではなく、二期目の時に先生には「私は色々なことをやっている。それをすこし少なくして藝大の為に尽くします」と仰っていただいた。「少し色々なことをやっている」というから、まあ文化財保護芸術研究助成財団

の理事長だったり、どこかのなんとかがだったり、10か20くらいなのかなと思ったら、なんと130幾つあったんです。よく出来るな、と思ったんですが、実に手際よく的確にご判断なさっていましたが、さすがに「先生、学長ですので、そんなに多くは…」と言った時に、「うん、わかった。ぱっさり切った」「あと幾つあるんですか?」「30幾つ」「まだそんなにあるんですか」という風なことがございました。でも実に藝大の為に、それ以上切ることの出来ない、ギリギリの部分ということで、先生にはご活躍いただきました。先生が何かの役職に就かれる時ってというのは、大体他の人では困難で上手くいなくてよばれている時が多い。はたから見ている時に、ちょっと気の毒だなあと思う時がありました。たとえば、もう終わった話ですからいいですよ、新美術館構想。なかなか上手くいかない。呉越同舟でなかなか上手くいかない。その時に先生が、確かその時の委員長に途中から呼ばれて、実に見事に振り分けをして、現在の新美術館が出来上がっている、という風なことが一つの事例としてございました。

その後も、先生からは色々なお話をいただきましたが、先生からお願いされたことで私のなかで深く残っているのがいくつかあります。例えば、カンボジアのプノンペン王立芸術大学の屋根がポルポト軍の攻撃によって無くなっている。是非それを修復するために資金を持って行って欲しくないか、と言われました。「先生、送ればいいんじゃないですか」「いやいやそうするとね、色んな事があって、これだけの資金がこれだけになっちゃうんだよ。だから宮田君、何人が誘って行って欲しくないか」と。まだその頃はポンポン(銃撃戦を)やっている時代なんです。「先生是非頼みません。こんなに面白いことはない」と行きました。その時、美術から3名、音楽からも3名、それと事務職1人、成田空港から飛び立ちました。飛び立つ前に藝大で、「はいっ」とそのまま帯の付いているお金を渡されましてね。成田でサラシを皆で買いました。サラシにお札を外為法に違反にならない程度に、幾らでしたかねえ、数字は忘れましたが、違反しない程度に包みまして、皆で縫いましてね、胴のところに縛って、そしてバンコクから乗り換えて、プノンペンに着きました。いやあ、大変な環境でしたねえ。私は昭和20年の生まれでございますし、東京に出てきたのは19の頃ですから、東京はちょうどオリンピックのころでしたので、戦災の風景というのは直接目にしたことはございません。写真でしかわかりません。ちょうどあの銀座の焼け野原の、4丁目の角の和光さんと三越さんがあって、あとは全部もう焼け野原、それと同じような感じでした。でもたくましかったのは学校の中で子どもたちは一生懸命絵を描いていました。一生懸命音楽をやっていました。そこへ私どもが資金を持って行った。そのお金を大使とそれから校長先生にお渡ししました。「もう一回来ます、その時には雨期になった時に絵が描けなくなるのではなくて、素晴らしい絵を皆さんに描いてもらい、その絵を平山先生に届けたいと思います」と校長先生に話をし、平山先生のお気持ちを伝え、他に絵の具や文房具などの物も渡し、そして帰ってきた記憶があります。その時にカンボジアの方々が大変喜んで下さって、アンコール・ワットや、アンコール・トムなど、色々ご案内してくださいました。そして、平山先生は日本で私どもの帰国を待っていてくれました。よくやった、と。

でも怖かったですね、まだ地雷とかそういったものがいっぱいあった時代でしたから。前後に民兵がついてくられて、その人たちが歩く道以外は歩かないでください、と言われました。どこでいつ何があるか分からないから。そんなことがありましたね。今思うと、先生に背中を押して頂けなかったら、あんな素晴らしい、と言うかスリリング、と言うか忘れられないような体験は出来なかったような気がします。

同じようにバーミヤーンの遺跡に対する修復、博物館の崩壊に対して支援をしようということで、これも先生の命を受けまして、今日も来て下さっている佐藤一郎教授と一緒に行きました。何回か挑戦いたしました。パキスタンから入ろうとして、なかなか上手くいかない。一時は飛行機にも乗ったのですが、動こうとした時に色々な事情があって、また飛行機を降りなければならないことがありました。あれもまた大変スリリングな時でございました。結果的には第一回目はバーミヤーンまで行けなかったのです。行けないことが逆に良くて、ガンダーラの事など、色々なところを逆に研究することが出来ました。初期の目的は達成しなくても、その環境づくりをする時でいいのかな、という感じがいたしました。それはなぜかと申しますと、「先生行けないんです。なかなか上手くいかないんです。十数名のスタッフがいるんですけど、どうしましょう」と東京に電話をさせていただきました。その時の先生から、「目的と言うのはね、すぐにではなくていいのだから、待っている時にまた色々な勉強が出来るよ」というお話をいただきました。ほっとするのと同時に、う～ん、それだったら何をすべきか、ということを感じさせてくれるような先生の教育方針というものに対して、私は大変感銘を受けたような気がしています。



最後ですが、東京美術学校の創始者でございます岡倉天心が、没した場所である赤倉にご同行させていただいたことがございます。奥様も一緒にございましたが。なにしろ、朝、明るくなった時には、もう絵を描かれるんですね。そこで本当に驚いたことがございます。六角堂を描かれた時です。私どもは六角堂を描くということは、まず円を描いて、6つの点を取って、そしてコーナーを取っていきながら、屋根を描いていって、それから徐々に形を作る。最後に最初に描いた軌跡である円を消しゴムで消していって形を作る。ところが先生は違うんですよ。いきなり擬宝珠を描いて、屋根のラインを引いちゃったんですよ。横で見えていまして、それはないだろうと思ったんです。そしたら全てのバランスがきちっと合ったところでまとまったんですね。30分でその六角堂、および空間・周りの風景を全て描き終わりました。そして先生は最後まで消しゴムを使わなかったんですね。まさしく先生の人生と言うのはそういう人生だったんじゃないでしょうか。常にプラスに、常に環境に対応しながら、新しい指針を示してくれました。私などは消しゴムばかりに頼っている人生でございますが、先生から教わったその前へ行く、そしてそれを大きな歴史に積み上げていくという芸術家でありながら、人生の素晴らしい教育者であり、そして私どもに大きな遺産を残して下さった先生に対して、敬意を表したいと思っております。

拙いお話で大変申し訳ありませんが、先生のご冥福と同時に先生がなさってくださった素晴らしい業績に私どもは今後それを大きく広げ、また伝えていくということをしていかなければならないと思っております。ご清聴ありがとうございました。

第二部

パネルディスカッション 「文化遺産保護と平和構築」

パネリスト

石澤良昭

(上智大学学長)

前田耕作

(和光大学名誉教授)

星野俊也

(大阪大学大学院教授)

大石芳野

(写真家・日本大学客員教授)

司会

青木繁夫

(サイバー大学教授)



パネルディスカッション

パネリスト：石澤良昭 (上智大学 学長)

前田耕作 (和光大学 名誉教授)

星野俊也 (大阪大学大学院 教授)

大石芳野 (写真家・日本大学 客員教授)

司会：青木繁夫 (サイバー大学世界遺産学部 教授)

(青木)

では、第2部に入ります。私が平山先生と初めてお会いしたのは、文化庁が設けましたアフガニスタンの復興事業支援に関する委員会でのことでした。私は、2002年1月に日本政府による復興支援計画のためにカーブルの博物館に行きました。その時に、とても印象に残ったことがあります。カーブルの博物館は、屋根もふき飛んでしまい、展示品はタリバンに壊され、収蔵品が入った箱が散乱しているという状況でした。博物館の玄関に立った時、玄関のところに垂れ幕が貼りだされており、そこには「歴史と文化がある限り国は滅びない」と書かれておりました。私はこの言葉にひどく感動し、それ以来、忘れることがありません。また、イラク戦争直後の2003年5月には、現在のイクロム所長でいらっしゃるブシュナキ氏と一緒に、バグダッド博物館などに対する復興支援計画のために、バグダッドへ3週間ほど出張いたしました。バグダッドの博物館に対する略奪行為は、世界中に報道され皆様もご存知だと思いますが、ここで印象的だったのは、アメリカ軍の戦車が博物館の正面玄関に配置され、博物館を警護しているという状況でした。また、世界遺産であるハトラでもアメリカ軍が警備をしていました。ある意味皮肉であります。このような行動により、遺跡が残っているという状況を目にしました。



戦争によって生じる様々な問題に対応するべく制定されたのが、さきほど文化庁長官からご説明のあった「海外の文化遺産の保護に関わる国際協力の推進に関する法律」です。この法律は、平山先生がその制定に心血注いだ法律ですが、世界各地で戦争による文化遺産破壊がおこなわれるなか、日本はどのような活動をしていったらよいのか、ということ方を方向付けしています。本日は、文化遺産保護と平和構築というテーマですが、具体的に日本はどのように貢献できるのかパネルディスカッションを通して、皆さんと考えていきたいと思ひます。

まず、4名のパネリストの方々に、10分から15分程度お話をいただいてから、ディスカッションにはいりたいと思ひます。

最初に、石澤良昭先生をご紹介いたします。今更説明しなくても皆様よくご存知だと思いますが、石澤先生は「行動する大学教授」という別称をもつ先生でいらっしゃいます。学生時代からずっとアンコール遺跡の調査研究をなさっており、現在は上智大学の学長を務めると同時に、上智大学アジア人材養成研究センターの所長として、上智大学アンコール遺跡国際調査団団長として、アンコール遺跡の保存活動を含めた人材養成などを積極的にすすめられています。では、石澤先生、よろしくお願ひいたします。



(石澤)

ただ今ご紹介いただきました、石澤と申します。もともとやっている仕事というのは、アンコール遺跡のそのものの研究でございます。私の方はどちらかといいますと、歴史研究が中心でございます。アンコール・ワットの時代、日本でいいますと奈良、平安、鎌倉、室町といった頃、栄えた時代がカンボジアにございました。それをアンコール王朝とよんでおります。その間、沢山の出来事は、貝葉というヤシの葉に書かれて記録されておりました。カンボジアには紙が入っておりませんでした。紙はベトナムまででございます。その貝葉はヤシの葉ですから全部虫食いになりまして、全く歴史が分からない。ですから謎また謎だということで、私は石に彫られた文字、インスクリプションといいます、「碑文」を読むことによって当時の人達の顔の見える歴史がわからないか、ということで研究を始めました。

それはそれとして、実はカンボジアは、内戦から和平、そしてその後は観光客がアンコールに入るといって、まさしく今日のテーマを地で行くような感じでございます。私が現地に入りました1960年代、そして70年になりましてすぐ内戦が始まりました。内戦が5年間続きまして、ポルポト政権という虐殺政権などといわれていますが、そういう政権が続きました。79年にそのポルポト政権が倒れ、次のヘンサムリン政権という、これはどこの国からも傀儡政権だといわれた政権となりました。私も12年ほど遺跡を見ることが叶いませんでしたが、ちょうど1980年に再度入ることができました。その時、十数年、人が全く手をつけないと、遺跡はこのような状況になるのかと、思いました。しかも、現地はまだ戦時下にありました。地雷があり、ポルポト派はタイ国境付近で、ベトナム・カンボジア連合軍を撃ちあっているという時代でありました。そういう時代にあって遺跡はどうなったのか、というのは本当に心配ごとでございましたし、自分自身も行って何としてでもこの目で遺跡を見たいということで1980年に入ったわけです。

先ほど外務省からお話がありましたが、やっと和平が成立し、カンボジアがもと通りになった。そうした段階で何かといいますと、やはり遺跡の保存修復となるわけです。いままで全く手がつけられていなかったものを、もとへ戻すということはどういうことなのか、ということを経験しました。何年も、何十年もかかって遺跡を保存修復している状況から、その保護活動が全部中止してしまうと、熱帯の降雨林といいましょうか、熱帯地域での石の状況がどうなるかということ、まざまざと見せつけられました。

パリ和平協定後、たくさんの人達がカンボジアを訪れるようになり、現在、2010年段階で年間70万～80万の観光客が訪れるようになりました。平和というのは本当にありがたいことで、観光によってカンボジアも大変潤いまして、外貨獲得では観光産業というのは大変大きなウェイトを占めております。このようなことを繰り返しますと、まさしく今日のテーマにあたると思うのですが、まずこうしたものを、スライドをおみせしながらお話ししたいと思います。



図1. カンボジア地図

(図1) カンボジアというのは三方が山脈に囲まれておまして、アンコール遺跡がこの付近にございます。こちらがダンレック山脈で、ここにプリア・ヴィヒアという今問題の遺跡がございまして。海にひらけた所はほんの少しでございます。真ん中をメコン河が流れている、こういう地形でございます。大平原と大密林とそれから大きな河という構成でございます。プノンペンはこちらでございます。それからホーチミンはすぐそばでございます。もともとフランス領インドシナの時には国道1号線につながっておりました。バンコクはこちらでございます。ですから非常にそう



いう点ではタイとベトナムに挟まれた国、カンボジアとラオスとはそういう国でございます。

遺跡が沢山ございます。約 600 年間続いた王朝でございますから、インドシナ半島のほとんど席卷するような状態です。ビルマの国境まで遺跡がございますし、それからラオスのビエンチャン、それからスコタイ。こちらはチャンパの遺跡を含めてフエ辺りまで。そういう意味では非常に広い大きな帝国でございます。だんだんとカンボジアのことがわかってまいりまして、帝国（エンパイヤ）の様をなしているのではないかと、というのが最近のカンボジア研究の大きな流れでございます。

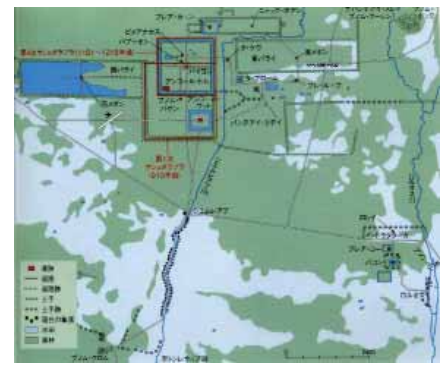


図 2. アンコール遺跡地図

(図 2) ご存じの通り、アンコール・ワットはここにございまして、そしてこれがアンコール・トムで、西バライと東バライがございます。シェムリアップ市内がこちらでございます。この道路をいきますとプノンペン、こちらに行きますとアランヤプラテートにまいります。地域は、扇状地でございます。シェムリアップという河によって扇状地が作られております。



図 3. (Delaporte 1880)

これは(図 3)1965 年のアンコール・ワットの図でございまして、この時にドラボルトをはじめとしてたくさんのフランスの方が現地に入りました。この少し前にアンリ・ムオという方が入っておりますが、ムオは絵を残しておりません。こんな感じで、参道も石が向き出たまままで荒れ果てております。



図 4. (Dieulefils 1909)

1907 年から、アンコール・ワットがカンボジアに戻ってまいりました。実は回廊のすぐそばに農家があって、オウギヤシがこのようにたくさん生えています。これは(図 4)1907 年にフランスの保存官のジャン・コマイユという方が入りまして、その人が、友人に頼んでこうした写真を撮ったわけでございます。ですから家は高床で、牛車でアンコール・ワットのすぐそばで畑をしていたと、こういうことでございます。

これは(図 5)1952 年でございまして、大雨が降りまして参道が崩落した場面でございます。1952 年のフランス極東学院からの絵図でございます。



図 5. (BEFEO 1952)

これは(図 6)私が 1996 年に撮ったものでございまして、現在こういう落ち着いた状況は撮れません。銀座とはいいいませんが、沢山の観光客がこの参道を通って中央祠堂までまいります。これだけ大きいものですから、約 35 年しかかかったと思いますが、これだけものを作ったというその王朝からは何か、人間のエネルギーとか、その民族のエネルギー、力というものを感ずます。そういうものに感服いたしまして、私ものめり込んだタイプでございます。



図 6. アンコール・ワット
(撮影：石澤良昭)

これは(図 8)、ピミアナカスという 10 世紀の菩提寺でございますけど、このよう



図 7. (撮影：石澤良昭)

に植物が繁茂いたしまして、そして水が溜まります。それでアンコール遺跡の保存修復というのは、一つはこの植物の芽を摘む、これを刈り取るということが一つでございます。二つ目は水を抜く。雨水がこの中に入りますと、基礎土台、土台を揺るがして上の構造物が崩落するということでございますので、雨水・水を抜くというのが非常に重要なことでございます。三つ目はカビの問題です。これはチオバシルというカビがございまして、特に砂岩につきますと、蟻酸を出してそして壁面を泥土化するということでございます。この三つでまさしくピミアナカス 1980 年代はこんな状況でございます。

これは(図 9) プリア・カーンという大きな寺院でございます。中に入るのに草が繁茂しておりまして、私どもは村の人に頼んで全部草を取ってもらって通り道をつくり、中へ入って行きました。中に入って行っても、結局つる草が絡んでおりますから、こういう状況でございます。これが平和になると全く問題なく、誰でも入れるし、どこでも入って行けるという状況になってきております。

これは(図 10) ネアック・ポアンという寺院で、池の真ん中に祠がございます。ここも、このように中に入って行けない状況でしたが、今私達がここに行きますと、非常にきれいな状況でございます。

大体こんなところでございまして、平和と戦争、そして遺跡の保存修復について私達が考える場合に、カンボジアは一つの事例になるのかなと、思っております。時間ですので、大体そんなところでございます。

(青木)

石澤先生ありがとうございました。石澤先生からはカンボジアの遺跡の画像をみせていただきながら、戦争によって混乱している時に遺跡が管理できないということの、恐ろしさということをお話しいただいたと思います。後ほどまたお話を伺いますが、まずそういう恐ろしさというものを認識してほしい、ということでしょうか。

(石澤)

はい、そういうことでございます。

(青木)

ありがとうございました。では引き続きまして、前田耕作先生にお話をいただきたいと思っております。前田先生はアフガニスタンのパーミヤーンの遺跡調査に 1964 年以降ずっと携わっておられ、現在ではユネスコ・アフガニスタン文化遺産保護国際調整委員としてご活躍であります。よろしくお願い致します。

(前田)

前田でございます。今カンボジアの画像を見せていただいて、私もカンボジアと縁が無かったわけではありませんでした。学生を終わってしばらくたってから、その頃横浜の棧橋からでていた、マルセイユ行きのフランス船に乗りました。フランス郵船といったと思います。その船に乗って、アジアを歩いたらどうなるのだろうか、と関心があって、船に乗って東シナ海を渡りました。鑑真和上はこんな



図 8. (撮影：石澤良昭)



図 9. (撮影：石澤良昭)



図 10. (撮影：石澤良昭)



荒波を越えてきたのか、という風に思いました。船は4万トンくらいあったのですが、非常に上下に揺れる体験をして、鑑真和上の日本へ来る苦難というものが大変よくわかりました。あれはやっぱり船に乗ってみたいとわからないので、今のように飛行機で行っては、なかなか鑑真さんのあの苦勞、最後に盲目になられるその苦勞というのはとても分からない。その時には飛魚もみて、飛魚は何十メートルも飛ぶんだ、ということも私にとっては大きな発見でした。

そういうことがあってカンボジアにも行きましたが、その時ちょうどベトナム戦争が始まる直前でしたから、橋を渡るたびに命を保証しないけれどもいいのか、ということでサインを求められて、「結構です」と言って、いくつかの橋を渡ってアンコールへ行った記憶がございます。まさに石澤先生に見せて頂いたアンコールそのまま、自然の大きな懐の中にすっぽりと抱かれた遺跡を何日も自転車で遺跡を見て歩いた記憶がございます。しかしご飯を食べようと思うと、蟻だらけ、という状態で、しかも暑い上に非常に湿潤なところでした。これは身にしてみてもわかりましたが、私が自分の調査のいつも出かけるところは、高所アジア乾燥地帯、まったく雨が降らないアフガニスタンでありまして、全く違った世界に来たのだと思いました。アフガニスタンへむかって、パキスタンからずっと北上していきますと、そのうちに汗が全く出なくなる。汗が出なくなってそのまま放置いたしますと、ちょうど青菜がしぼむように体がしぼんでしまう。そして体が自由に動かなくなるという経験をアフガニスタンではしたわけです。カンボジアのような湿潤アジアとアフガニスタンのような乾燥アジア、この二つのアジアの特徴の両極端を歩いたということになります。

私が最初にアフガニスタンに行きましたのは1964年ですから、これは東京オリンピックの年で、私が出かけるときはまだ新幹線は走っておりませんでした。今日ここにおいでになっておられます薬師寺の前管長安田英胤さん(今は長老であられますが)から、この年は玄奘三蔵没後1300年の記念の年だということをお聞きしまして、由緒ある時期に行かせていただいたというふうに喜んでおりました。では、私が最初にとりかかった頃のパーミヤーンとその現状を、画像をお見せしながら、皆さんに少しお話ししたいと思います。

これが非常に有名なパーミヤーンの谷で(図11)、西の大仏と東の大仏があります。この二つが世界的に有名なものでした。このパーミヤーンに、このような大仏があるという最初の報告は、何といても629年~30年にかけての時期にここを訪れた玄奘三蔵によるものです。ご存知の『大唐西域記』に、この国を訪れたことを書いてございます。この二つの大仏、皆さんはどちらの大仏から作ったと想像されますか。誰が見ても最初にこちら東方の大仏から始めたに違いないと、直感されると思います。私も直感で、そう考えました。

夜になると、この東の大仏の真上に、つねに北極星が輝きます。そうすると、古代の人達がそういう宇宙的な条件というものを見過ごして大仏を作ったとは思われません。したがって、やはりこちらが先だろうという風に私は直感したのです。日本隊とドイツ隊がパーミヤーンにおいて活動をおこなっていますが、大仏の衣をつくる土中に入っていた藁クズをC14(カーボン・フォーティーン)でテストをしたところ、東の大仏が6世紀の終わり、西の大仏が7世紀の始めという値がでてまいりました。私の最初の直感が正しかったということが証明されて喜んでおります。



図 11.

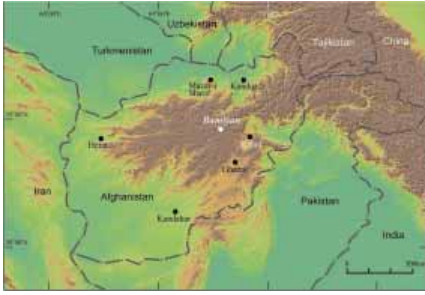


図 12.

これがご存じのアフガニスタンの形であります(図12)。こういう形をしているので、アフガニスタンの地図を最初にご覧になって、「ああこれはナスビの形じゃ」とされた画家がおられます。平山先生の絵の師匠でもあった前田青邨さんです。ここが有名なワッハンの回廊です。玄奘さんは最後ここを抜けて行かれます。ご覧になってお分かりになるのは、アフガニスタンはイラン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、中国、パキスタン、この6カ国にすっぽりと囲まれており、海に面しておりません。そして、私達が注目しておりますカラコルム、パミール、それから続いてヒンドゥークシュというアフガニスタンの真ん中を走る大山脈へと繋がりますが、その大山脈の真ん中にあるのがパーミヤーンということがあります。ご覧になってお分かりになる通り、国土の7割ほどが山で、他の青く描いてありますが実は砂漠でありまして、平野というのは、大きな街がある部分だけです。ここにあるのが有名なカンダハールですね。かつてアレキサンドロス大王がここに入ってきて、現在のカーブルの方へ、そして北の方に抜けて現在のウズベキスタン、タジキスタンへと軍隊を進めていきます。彼等は軍隊を進めただけではなくて、そこに駐屯軍を置き、そこに都市を建設していきましたので、その痕跡が現在も残っております。カンダハールは、現在大変な激戦地でもありますが、私達もたまたまこのカンダハールを通過せざるをえなくなりまして、飛行機はここで給油をしました。その間、ほとんど1分か2分置きに戦闘機が発着しておりました。極めて戦場に近いと実感させるのがカンダハールでした。今、色々問題になっておりますのがカーブル近くの地域で、ここはタリバンがいるといわれています。そしてアメリカ軍、アフガニスタン軍、それから国際軍などが、色々な作戦を展開している地域もございます。クンドゥズは、私達には極めて忘れ難い遺跡でありまして、京都大学が1960年代にここで仏教遺跡の調査をしております。そのクンドゥズは、昔活国と呼ばれたところで実は先ほどもふれました玄奘三蔵さんが最初にアフガニスタンに足を踏み入れた場所でございます。したがって私達にとってはクンドゥズこそ非常に重要な場所で、仏教遺跡もそこにありまして、玄奘さんの記述通りであるのかどうかということを目撃してきた場所です。最近ではドイツ軍が駐留しておりますが、やはり戦闘があったと聞いており、ここも必ずしも安全ではないという印象を受けております。というわけで、アフガニスタンは最大の問題は国内の治安をどのようにして安定化していくのかということになります。このような状況の中で、日本が行える最も有効な支援の仕方は何なのか、ということが常に問われる場所、それがアフガニスタンといってもいいと思います。

1842年に、ピンセント・エアーというイギリス人が描いたパーミヤーンのスケッチがあります。第一次英ア戦争では、戦争のさなかに多くのイギリス人が捕虜になります。カーブルの近くで捕虜になるのですが、最も隔離された場所ということで、山の真ん中にありますパーミヤーンに捕虜を全部連れてきたのです。しかし、その捕虜達は非常に優雅でありまして、一定の場所には寝泊りを強要されずけれども、日中はやる事が無いというので、スケッチブックを抱えて何人かが、その当時のパーミヤーンの様子を描き残しています。その中の一人、ピンセント・エアーが残したものが、とても重要な記録となりました。東の大仏の前が、非常にフラットな広場になっているということもこれで分かります。横にみえる山のようなものも現在はありません。おそらく近年の街づくりのプロセスの中で、山などが崩されて道路が作られるなど、バザール、つまり街の形成のために地形が



変わって行ったということを知ってくれるものです。現在はケンブリッジ大学にこれらスケッチは保存されているということです。

破壊前の西大仏と東大仏です(図13)。堂々とした構えなのですが、顔は早くから削られたと言われていました。アンコール遺跡群でも首の切られた仏頭が出土していて、石澤先生にうかがったところ、非常に丁寧に首を切っているので、おそらくこれは、仏教徒達が破壊を強いられて、丁寧に切ったのであろう、というご意見でした。私もバーミヤーンのこの顔は、おそらくバーミヤーンの仏像を造ったその末裔達、血筋を引く者達がイスラーム改宗を行う時にやむを得ず壊したのだろう、または壊させられたのだろうと思っています。なぜならばとても丁寧に削っているからです。じっくりとみていくと、ただ単に削って崩壊させて顔面のところだけを取り払うという単なる破壊作業ではなかったという印象を私達に与えます。これは、ある意味文化を守って行くうえでやむを得ないので、最低限の破壊でとどめようと、土地の人達が見出した方策であったという風に考えられないかと、私は思っております。

この東西の大仏は、実は高さが違います。東の大仏が35メートルと西の大仏は55メートルです。東は玄奘三蔵さんが釈迦像である、釈迦の立像である、という風にきちっと書かれたものです。西の方は残念ながら石の像であるとしか書いてありません。しかし私達は、東の大仏が当世の仏様、つまり釈迦ならば、こちらにしの大仏は未来の仏陀、つまり弥勒像であろうと思っています。ですので、西は弥勒の大仏、東は釈迦の大仏という風に今はよんでおります。

残念ながら東の大仏は破壊されました。多分ナパーム弾を使ったのであろう、と言われております。いっきに壊したわけではないのです。西の大仏も数日かけて破壊を被ると、ということになりました。これが破壊後の西の大仏と東の大仏です(図14)。平山先生は壊れる前のスケッチを残されましたし、それから破壊後すぐ現場に駆け付けられまして2002年にも破壊直後のスケッチを残されています。現在の大きな問題は、大仏を形成していた石塊をどのようにきちっと保存できるか、ということです。それから現状よりも崩壊を進めないで、どのように保存できるのかが大きな課題であります。

これは西の大仏の左足です(図15)。脚の部分がありません。この大きな石塊も含めて全部仏龕の前に引き出し、清掃し、後壁を補強して改めて大仏再建を検討しようというのが私たち国際チームの作業工程の一つです。

この写真ご覧になってお分かりになりますか(図16)。西の大仏の衣の裾の部分が落ちてこのようになっています。実際そばに寄って見ると、非常に大きな塊だということが分かります。

これら破片を全て引き出すプロセスも簡単ではありません。まず、地雷が埋められているのか無いのか、そして不発弾を処理しなければなりません。これは完全に不発弾として残っております。こういったものの処理と、壊れた石塊を丁寧に保存するというふたつの課題にむきあわなければいけないということになります。

こちらは先ほどの東の大仏の足下に作られた仏堂です(図17)。上の天井は、ラテ



図 13.



図 14.



図 15.



図 16.



図 17.



図 18.



図 19.



図 20.



図 21.

ルメンデッケという井桁くみ上げ天井になっていますが、八角堂の仏堂がここにあったわけです。塑造の仏像は早くに無くなりましたが、仏堂そのものも、いかに大きな力で爆破されているのかということを示しています。

東大仏を納めていた仏龕は、いわば天然の防御壁になっているわけですが、それすら爆破の影響により崩壊の危機にあります。壊れていくことを防ぐために山を背景にしてアンカーを打ちこむ、そういう基礎作業をイタリア隊のロディオ社が受け持っています。かつてあのアブシンベルの神殿を分解して移動させたグループの会社であります(図 18)。

これが(図 19)、残された部分をどのように可能な限り保存できるか、ということで足場をくみ上げたところです。この足場をくみ上げることによって我々がかつて見ることが出来なかったものが沢山発見されました。

これは(図 20)、日本隊が石窟の壁画のクリーニングと保存のための手当てをしているということです。こういう状態で、ずっと立ちっぱなしで上を向いた状態で仕事を強いられるという厳しい条件の中でやっております。

爆破された後、二つのことがバーミヤーンで生じました。一つはここで映画の上映がなされたということです。これは、文化を復興させる、「私達はバーミヤーンから文化を消さない」という意思表示であったと、後でこの映画を上映したバルマフ監督にお聞きしました。もう一つは、戦車が放置され、まだ埋蔵された地雷がどこにあるかも分からない状態でも生活再建しようとする人々の意思です。生活再建と文化の復興というものを切り離さないでバーミヤーンでその挑戦をしようとしているところが、極めて感動的であったし、バーミヤーンに関わって良かったと思っています。

最後に、こういう仕事をする時には同じ釜の飯を食わなければ駄目だということでありますが、これは(図 21)同じ穴の中で飯を食うという、石窟の中での昼食の風景の写真です。

(青木)

ありがとうございました。バーミヤーンの現状を保存の問題も含めてお話をいただきました。やはり同じ釜の飯を食わなければいけないんだ、と思っております。これは、私達も海外で仕事をしていて痛切に感じていることです。引き続いては、星野俊也先生にお話ししたいと思えます。国際連合日本政府代表部に公使参事官としてお勤めになったこともあり、現在では大阪大学国際公共政策研究科の教授でいらっしゃいます。国際協力、国際紛争に関して詳しい方ですので、現状についてお話しいただければと思います。

(星野)

ご紹介どうもありがとうございます、星野でございます。石澤先生、前田先生は現場で実際に遺跡の復興修復ということで直接携わっていらっしゃる方々ですが、私自身は専門が国際関係論で、主に国際政治の観点から紛争と文化の問題、ある



いは文化遺産が平和の構築においていかなる役割を果たしうるのかという問題に関心を持っておりますので、今日はその点についてお話をさせて頂きたいと思っております。これまでお二人の先生方からは文化遺産の保護という角度からのお話がありました。私は紛争後の平和構築の観点からの話になります。

カンボジアの場合は、先ほど石澤先生のお話にあったように、内戦によって本当に貴重な遺産が放置され、荒廃する状況がありました。そして、アフガニスタンの場合、前田先生からのお話の通り、紛争の中で特に憎悪が高まりによって、イスラームの宗教には偶像を禁止するという強い考え方がありますので、タリバンという非常に原理主義的な者の手にかかるとそれを仏教遺跡を破壊するという極めて悲惨な事態に立ち至りました。では、紛争という困難な壁を乗り越えて平和を構築するというのはどういうことなのでしょうか。

日本は、紛争後の平和構築を日本外交の中の重要な柱に位置づけています。2010年4月16日に国連安全保障理事会の公開討論で岡田外務大臣(当時)は、日本の外相としては初めて安保理会合の議長として、国際社会にとって非常に重要な問題について議論をする場を作りました。その時に、日本が取り上げたテーマがまさに紛争後の平和構築でした。そして、深刻な紛争を経験したアフガニスタン、ボスニア、シエラレオネの各国から閣僚をおよびし、紛争から立ち直ろうとしている国々をわれわれはどうやって支援していったらよいのかを議論しました。

会合の冒頭で、岡田大臣は議長として、「どうして停戦終結後も、紛争は再発するのか。どうして平和は定着しないのか。この問いに対する回答のカギを握るのは、紛争後に人々が将来に希望を持つことだ」と述べました。私はこの安保理公開討論の前に、少し準備のお手伝いしたわけですが、こういう形で国際社会が注目する場所で平和の構築の重要性ということをアピールできたということはとても意義深いことだったと思います。

国連というのは、紛争の解決、または紛争からの復興ということも含めて国際社会における平和をいかにして作りだし、維持していくか、ということに力を尽くしており、日本もそうした国連の役割を重視する政策を進めています。もちろん、予防できるようならば紛争は予防するにこしたことはありません。ですが、不幸にして紛争が起きてしまった場合には、出来るだけ早く、しかも平和的な手段で解決を求めて調停努力をすることが求められます。和平合意が結ばれると、皆さんもよく知っている国連の平和維持(PKO)活動が現地に展開し、まだ不安定な現地の治安を確保し、平和が持続する足場固めをします。ですが、平和を現地に定着させるためにはより息の長い、中長期的なサポートが必要です。平和構築とは、紛争当事者たちとの間の和解を進め、新しい国づくりを通じて紛争が再発しないような社会構造を築いていく努力を指します。

従いまして、「平和構築」というのは、少なくとも国連の活動の文脈では、激しい紛争を経験した国において、現地の人々が自ら主体的な意思によって対立を過去のものとして、持続的な平和を作ろうとするその努力、平和を勝ち取ろうとする努力を支援するプロセスだということができると思います。その意味で、青木先生が最初に、「歴史と文化がある限り国は滅びない」という言葉をおっしゃいましたが、そういう思いを持っている人達に対してどのような手を差し伸べるのか、ということになります。平和構築をする人達というのは現地の人々です。国際社会は、つまり我々は、それをいかにサポートするのか、ということをしかりと考えていかなければいけません。





図 22.

しかし、これがなぜ難しいかというと、和平合意が結ばれても、実はその半数が5年以内には破たんをし、紛争が再発してしまうというぐらい、和平というのは脆弱なものなのです。それでも国際社会としてしっかりとサポートしていく必要があります。

東チモールの例で考えてみましょう(図 22)。東チモールは、インドネシアに長く支配されていた島です。インドネシアに併合される前は長い年月にわたってポルトガルの植民地でした。ですから住民のほとんどは敬虔なカトリック教徒でした。しかし、1999年に独立しようという動きに対して、それを阻止したいというインドネシアの民兵が(ほとんどがイスラーム教徒ですが)、徹底した破壊と殺戮を繰り返していました。その時に、真っ先に狙われてしまうのはカトリック教会で、教会は虐殺の現場になり、いまは慰霊碑が作られています。私は、何度も東チモールに行っておりますが、家は破壊されて屋根は焼け落ち、さらに山の上の家々まで破壊され尽くされる徹底ぶりでした。

こういった破壊と虐殺を乗り越えて平和を構築していくためには何が必要かというと、もちろん治安を安定化させるという話が真っ先にでてくると思います。そして、そのうえで対立していた人達同士で、対話と和解を進めること、新しい治安組織を作ることなどの必要性がでてきます。また、今までの武装勢力の武力は放棄し、動員を解除し、元兵士たちを社会に統合させる、という作業などがいろいろ出てくると思います。新しい憲法の下、新しい政府、議会、司法制度を作ったりするという事、そして、政治指導者の間では新しい政治権力の分配の方式を考えるというふうなことが考えられます。これらは紛争を経験した国で真っ先にやらなければいけないことのひとつです。もちろん、破壊された社会インフラの復旧や整備も入ります。

例えば東チモールの場合、新しく作られた警察、新しい議会、新しい大学、新しく和解をするために作られた場所、和解のための集会、という様々な努力がなされています。しかし、これだけで平和というものは回復するのか。構築することが出来るのでしょうか。

今、私がいままで申し上げたものは主に制度的な側面です。制度を新しくしたからといって人々の気持ちが新しくなるわけではない。真の平和の構築のためには、より深層にまで踏み込んだ支援が必要なのではないかと思います。その第一は、おそらく人々の生活をしっかりと再建することだと思います。「平和の配当」といってもいいかもしれません。例えば、先ほど虐殺の現場になってしまった教会で子どもたちが日曜日に礼拝が出来るようになる、ということもそうでしょうし、学校で再び勉強が出来るということもそうでしょう。あるいは自分達のお店を持って仕事出来る、本当に普通の日常的生活が出来るということ、つまり、生活の再建そのものも非常に重要な平和の構築の基盤なのだと思います。水や電気など生活に必要なインフラが手に入ることも紛争後では重要です。

しかし、そのうえで、今日の多くの紛争が、民族や文化や言語や価値観を異にする人々の間起こる傾向が強いものですから、そこでは私は、やはり互いの異なった文化や価値観を受容するという発想を育てていくということが、最も深層の平和の構築の柱になるのではないかと思います。

歴史というのは非常に重層的です。パーミヤーンやアフガニスタンのあの場所も過去に多くの帝国が攻防を繰り返した場所でした。歴史には地層の重なり合いのようなものがあるわけです。たとえば、トルコのアヤソフィア博物館を見てみ



ましよう。もともとはギリシア正教の大聖堂で、ビザンツ時代に建設された建物ですが、その後、オスマントルコが入ってきて、イスタンブールを支配した時代にはモスクに作り変えられ、ミナレットが追加されて今の外見になり、内部にはコーランの言葉が散りばめられることとなります。しかし、その当時、もともとの壁に描かれていたキリスト教の壁絵については破壊されることなく、白い漆喰を上から塗り重ねるといった処理がされました。そして、20世紀に入って、共和国となったトルコは、この建物のイスラームのモスクでもキリスト教の教会でもない博物館にしたのです。そこでは、壁の漆喰は剥がされ再び日の目を見たキリスト教の聖画とイスラームのコーランの文字が同時に見られる非常に興味深い体験ができます。これはトルコ政府が、ビザンツ時代も自分たちの歴史の一部だと認識をした例と言えるでしょう。そして、政治的には、欧州連合 (EU) に加盟することも含め、ヨーロッパとの繋がりというものを確認している姿をここにみることもできるのかもしれませんが。このように歴史というのは重層的に重なっています。

他方、日本としては過去の植民地主義の歴史にも目を向けなければいけないものもあります。一例をあげれば、ソウルにある朝鮮王朝の景福宮。これも世界遺産ですが、実はここに日本統治時代の朝鮮総督府がありました。朝鮮総督府の建築物としてみれば重厚で見ごたえのあるものなのですが、光化門と本殿との間に非常に威圧的なかたちで建造されていました。戦後は韓国の中央博物館として利用されていましたが、キム・ヨンサム政権時に景福宮を元の形に戻す計画のなかで取り壊しが決定され、解体されました。歴史問題で日韓関係が緊張したこともあり、朝鮮総督府の建物は歴史的な建造物だとしても移築されることなどはせず、解体が決定されたのです。このように過去のわだかまりが、歴史遺産の取り壊しにつながる事もあります。こうしたわだかまりをどうやって乗り越えて行くのか、ということをしっかりと考えていく必要があります。

より深層のレベルで平和を構築していくためには、やはり文化遺産というものを互いに保護すること、そして、それを外交の柱の一つに位置付けていく、というのがとても意味のあることなのではないかと思っています。互いの文化遺産を保護する心のなかに平和は構築される、ということもできるでしょう。

平山先生のご尽力もあって海外の文化遺産を保護するための法律（「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」）が成立しましたし、このコンソーシアムが様々な形で地道な努力をされているということはとても素晴らしいことだと思います。

国際政治の世界では、いま「保護する責任」という概念がとても大きな話題になっています。人々が紛争の中で厳しい状況におかれている時には、国際社会はその人々を保護する責任がある、ということですが、おそらく文化遺産版の「保護する責任」というものを理解し、それをサポートするのも大事な作業なのではないかと思っています。

平和の礎として平和構築を考える時には、今日のテーマに関係しますが、人々が平和を実感することが大切です。そこでは、新生国家の制度的な側面が整備されるということだけにとどまらず、難民が帰ってくる、元兵士が社会復帰する、そして生活が再建される、というようなものと共に考える必要のあるというお話をしましたが、さらに、その上に、人々が互いの文化財を共通の文化遺産として尊重し、敬意を持つ、あるいは受容する、そのような気持ちが醸成されてこそ平和が構築される、と考える必要があると思うのです。互いの文化遺産を否定し合うのではなく、保護し合う心のなかに平和が構築される、というのはこういう意味です。この分野で、日本は大きな役割を果たすことができると思います。

日本は今、「人間の安全保障」という概念を非常に重要な外交の考え方として位置づけています。この「人間の安全保障」の定義は何かと言うと、人間にとって最もかけがえのない生の核心的な部分を守るということだと思います。これは当然、生命に関わる部分ですが、同時に文化といった側面もやはり人間にとってかけがえのない生の核心部分といえるのではないのでしょうか。

平山先生の書き残されたものを読んでみると、真心で支援していくべきだ、ということが強調されておりましたが、私は、これは「人間の安全保障」を尊重するというアプローチと非常に重なるものがあるのではないかと思っています。そして、多様性を大事にするアプローチ、これは金子みすずさんの「みんなちがって、みんないい」という考え方に通じるものかもしれませんが、そういうものを是非進める外交を日本がしていければいい、と思います。そういう外交の主流化というものが必要だとも思います。

最後に国連の話をもう一つだけさせて頂きたいと思います。現在、国連は改修中なのですが、ニューヨークの国連本部の建物のなかを見学された方でしたらご覧になったことがあるかもしれませんが、展示品のなかにノーマン・ロックウェルというアメリカの画家が描いた絵をベースにしたモザイクがあります。「黄金率」というタイトルがつけら



図 23.

れているモザイク絵です(図 23)。この中央の部分には「己の欲するところを人にもこれを施せ」というマタイの福音書の言葉が刻まれています。この考え方は、イスラームにも、儒教にも仏教にも、どの宗教にもある共通の「黄金律」なのではないか、ということでそのタイトルがつけられたのだと思いますが、さまざまな民族と文化をもつ老若男女が平和を祈っている絵です。だからこそ国連で飾られているのですが、こういった文化の共存という問題を考えていくことも、平和の構築というなかでは非常に重要な問題提起になるのではないかと、思います。ご清聴ありがとうございました。

(青木)

ありがとうございました。私達が普段あまり聞かないキーワードがたくさん出てまいりました。平和構築に対する国際社会の動きと取り組み、そのなかでの文化の位置づけがよくわかったと思います。それでは続いて、大石芳野先生にお話しただければと思います。大石先生は写真家として、様々なところにいってらっしゃいまして、戦争や内乱による問題を抱えながらもたくましく生きる人々の写真をずっと撮ってこられました。この功績により、様々な賞を受賞されておりますが、現在では日本大学客員教授もされ、後進の指導にもあたってらっしゃいます。それでは先生よろしくお願い致します。



(大石)

今、三名の先生方のお話をうかがってつくづく思ったことは、やはり祖先達がつくったこの大切な、貴重な文化というものを守り育てるには、当然のことながら平和でなければならない、ということです。

遺跡というのは、戦争や恐怖政治になると一夜にして価値が逆転して、そこで戦う兵士たちの砦になってしまうことがあります。また、監獄とか処刑場などにもなってしまうんですね。そういう状況というのはいくつも見てきました。人間の命さえ危ういなかで、文化とか宗教とか環境などにも気を配ることはなかなか容易ではないということです。人々の心を傷つけて、それから文化に対する意識も喪失させてしまいかねない。文化遺産というのは平和のなかにあってこそ、私達の生活を支える感情を高めたり、生きていることへの感謝を育んだりしてくれるものです。ひいては、将来への希望にも繋がっていくのではないのでしょうか。過ちというものを繰り返さないこと、そのためには過ちの実態を深く追求することが必要ではないのでしょうか。そして、祖先が築いた文化遺産、様々な文化、それを今こそしっかり受け継いで、現在と将来の平和の実現に活かす道を見出すということが大事だということを、改めて思います。戦争はいかに大事な文化を破壊してしまうか、ということになると思います。

(図 24) この写真の中央にいらっしゃるのが、平山郁夫先生です。1991年1月1日にNHKでアンコール・ワットから中継をしました。遠くでドーンという砲弾音がしたりする緊張した状況のなかで一日中、日の出から夕陽まで、そして夜、アンコール・ワットをライトアップさせたなかからも中継しました。

(図 25, 26, 27, 28) ここからの4枚の写真はカンボジアです。カンボジアは、先ほど石澤先生のお話にもありましたけれども、ポルポト政権によって自国民に対する大虐殺や文化、宗教が禁止され破壊されました。そこからの復興の奇跡という



図 24.



図 25.



図 26.



図 27.



図 28.

のは並々ならないものがあります。これは、夫を殺された女性達ですが、殺された理由は男だというだけの理由です、と口々に言っていました。そして内戦となって対人地雷が埋められて大勢の一般の人達が犠牲になっています。今もまだそうした対人地雷は沢山残っています。

(図 29) これはアンコール・ワットです。先ほど石澤先生が 1980 年に現地にいらっしゃったとおっしゃっていました。私も一緒に行ったわけではないのですが、これは 1980 年の写真です。当時のアンコール・ワットというのはまだ整備の前で黒い石でした。今はインドの支援活動で磨かれて白くなりました。

(図 30) これはプリア・ヴィヒアです。今年初めて行きました。タイとの国境にあって新しく世界遺産にもなったものです。この右の下の方にちょっと置いてあるのはカンボジアの紙幣なのですが、アンコール・ワットと同様にデザインされています。このプリア・ヴィヒアに関してはまた後でお話したいと思います。

(図 31) 僧侶です。カンボジアは上座部仏教の国として大変信心深いところです。



図 29.



図 30.



図 31.



図 32.



図 33.



図 34.



図 35.

(図 32) ここからはベトナムです。ベトナムというのはベトナム戦争でご存じのように、アメリカとの長い戦争が続いて、ミソンという遺跡も爆撃が続いて破壊されました。

(図 33) これは古都フエの宮殿の壁に弾の跡が残っているものです。自国の努力とユネスコなどの協力でのちに見事に修復されました。

(図 34) アメリカ軍が中南部の森林の 6 割以上に大量の枯葉剤、ダイオキシンですね、これを散布しました。そのために自然は汚染されてなかなか回復しません。ここに住んでいた動物達もやられましたけれども、人間も同様です。障害を持って生まれてきた子供達が大勢いますし、今でも生まれています。

(図 35) この写真はベトちゃん、ドクちゃんです。今ドクさんはお父さんになって、双子の赤ちゃんがいます。ベトさんは残念ながら亡くなりました。

(図 36) この少女は生まれながらにして障害を持っています。お父さんがサイゴン軍側、というのはアメリカ側なのですが、その兵士として森の中で戦って被爆し戻ってきて生まれたのがこの少女トアンちゃんです。

(図 37) こちらの写真は北に住んでいる人です。北緯 17 度線よりも北は、ハノイでも枯葉剤は一滴も撒かれていないのですが、夫が南の方へ兵士として行き、帰省後に生まれた子どもがこのような障害を持ってしまうケースが沢山あり、苦しんでいる人が大勢います。

(図 38) ここからはラオスです。これは先ほど石澤先生の地図にもありましたが、チャンパサークにあるワット・プーというラオスの遺跡です。クメールの遺跡ですが、ラオスの遺跡として世界遺産となりました。

(図 39) 35 年も前に戦争は終わっているのですが、大量の爆弾、とりわけクラスター爆弾というのがベトナム戦争の影響で投下されました。これらの不発弾が未だに沢山の人達を殺傷しています。戦争が終わって 35 年も経っているのですが、地中の不発弾が畑を耕している人を脅かしたり、遊んでいた子どもの命を奪ったり、焚き火にあたっていた人達などを傷つけるなどの被害が続出しています。



図 36.



図 37.



図 38.



図 39.



図 40.



図 41.

(図 40) この少女は焚き火にあたってやられてしまいました。

(図 41) この若いお母さんは、戦争が終わってから生まれました。けれども彼女の娘 10 歳は戦争を全く知らないのにクラスター爆弾の小爆弾で命を落としてしまいました。このお母さんに娘さんの話を訊きましたが、話し始めてから、世界中が洪水になるくらいずっと涙を流して、帰る時にも涙は流れ続けていました。随分と長いあいだ会っていたのですが。

(図 42) ここからはアフガニスタンです。1979 年にソ連軍が侵攻して、今でもアメリカ軍などの戦争が続いて、人々はずっと戦争の中にいるのです。貴重な仏教遺跡は政治に利用されて多くは破壊されました。この写真はタリバンが破壊された仏像があった跡と旧ソ連軍の戦車です。

(図 43) これは先ほども前田先生 (のスライド) の中にありましたが、壁画が描かれていた石窟が沢山あるんですが、その石窟のなかで暮らしている家族のひとり 4 歳の少女です。彼女は生まれてからずっと戦禍のなかを逃げ回って生きてきました。



図 42.



図 43.

(図 44) この写真はアメリカ軍の爆撃があった、というか今もありますが。そうした爆撃で家族が殺されました。その兄妹です。恐怖と貧困というものが体も心も疲弊させてしまっています。

(図 45) タリバンとの内戦の中でお母さんが目の前で殺された少女です。この時はまだ 12 歳です。

(図 46) この少女は両足、膝より上をクラスター爆弾で失いました。お母さんは即死でした。

(図 47) これは復興したヘラートのガラス器です。ガラス職人というのはタリバン時代、文化が否定されていたので、殺されました。石澤先生も後でお話しされると思いますが、アンコール遺跡の修復専門家も大勢殺されました。同じようにアフガニスタンでも殺されました。たった一人生き残ったこの職人が、このガラス器を復旧させました。今では、職人も少し増えたりして、カーブルに、もしいらっしゃる人がいたら、このガラス器を目にすることができると思います。

スライドは以上です。やはりどの遺産にも昔の人が一生懸命作って考えた、人間とは何か、命とは何か、大地とは何か、宇宙とはどうなっているのだろうか、というようなこと、壮大で奥深いことを深く考えてきたのだ、だから作ってこれたのだ、といったことを私も、現場で撮影をしながらそのことを、とても強く感じました。



図 44.



図 45.



図 46.



図 47.



(青木)

ありがとうございました。文化はこういった人達を支えられるのか、というのは、重い命題だと思います。貴重な写真をたくさん見せて頂きましてありがとうございます。

それでは一通り先生方にお話しいただいたわけですが、幾つか議論をしていきたいと思います。まず、平和や文化といった言葉がキーワードとして出てまいりましたが、文化と平和というのは表裏一体の言葉ではないのかと私は思っています。どういうことかと申しますと、文化は、平和がなければ、きちとした形で保護して活用していけない。一方、平和というのは文化によって維持され、平和へのモチベーションを持たせるというようなことがあるのではないのでしょうか。文化は悲惨な人達を支えられるのか、あるいは文化を支える人達を殺してしまうということがどういうことであるのか。文化遺産保護を中心に活動される先生方と、星野先生のような国際政治学の立場からのご意見では少し違ったものがでてくるのでは、と思うのですが、まず、石澤先生どうお考えですか。

(石澤)

カンボジアの内戦から和平、そして国連平和維持軍の進駐、そして現在のカンボジアというのをみてまいりました。そのなかでやはり平和と文化というのは表裏一体ですが、逆に文化があるからこそ、平和へ、という形がみえてきております。たとえば、常にカンボジアがアンコール・ワットを国旗の中に掲げているように、アンコール・ワットの前で紛争をやめようという誓いをたてるわけです。シハヌーク元国王が、当時はまだ国王ではなく殿下でしたが、対立する四派をよんで、アンコール・ワットの前で、確か平山先生もご一緒だったと思いますが、誓うわけです。要するに、これからは平和を目指し、お互いにお互いが攻撃しないようにしようと。アンコール・ワットという、民族のアイデンティティをそこに固めたような、いわばカンボジア民族の象徴の前で誓いをする。そういうことが何回かありました。1回で対立がピタットとおさまるはずはないので、何回か繰り返し行って和平に持っていくのです。そこには、国連の力が必要だったわけですが、気持ちの上ではアンコール・ワットの前で誓いをするというのは、神に誓いをする、仏様に誓うのと同じくらいの心であるわけです。このように、逆に文化があるから、これから平和へ向かおうと心をもっていく。そういうものが平和を引っ張り出すというような事例もあるのかなと思っています。

アンコール・ワットは、幸い爆撃などで破壊されることはありませんでした。放置されたといえばその通りですが、それ以上、意図的に破壊しようとしなかった部分がございます。そこには、自分達の民族のシンボルであるという気持ち、対立する人々のなかにも共通の認識であったと思います。確かに、一部には破壊があったことは事実ですが、そこは手をつけないでおこう、ということがあったのではないのでしょうか。そのあたりから、文化から平和に向かうというプロセスがカンボジアでみることができると思います。平和があってこそその文化か、というよりは、文化あってこそその平和、という動きがカンボジアにはあったと思っています。

(青木)

確かにその通りだと思います。民族や国家のアイデンティティとしての文化の存

在があります。私が冒頭にお話ししました「歴史と文化がある限り国は滅びない」というところに通じると思うのですが、前田先生はいかがでしょうか。

(前田)

文化遺産国際協力コンソーシアムをつくる時に、コンソーシアムの一つの基本的な精神として、まず文化遺産とは何であるか、文化というのはそもそも我々自身の醸し出す一つの香りではないかという議論をしたことを覚えています。そしてコンソーシアムが作成した基本方針の中にその文章が書きこまれたのではないかと思います。それは非常に重要なことだと思います。しかもアフガニスタンの場合には、考えてみて頂きたいのですが、あそこは現在イスラーム教徒が多く占める国家です。イスラームでもシーア(派)の信仰が極めて厚いところなんです。そこで、仏像、大仏といった仏教的なものをどのようにして自分達の文化の香りとしてとらえられるか、という問題がアフガニスタンの場合には当然あるわけです。かつての自分達の歴史の中に一つの回答を見つけるということが必要ではないかということをおバミヤーンの人達には言いましたし、そう思っています。というのは、玄奘三蔵さんが行かれた時はバミヤーン仏教の最盛期でありましたけれども、ご存知のように、8世紀の末から9世紀の始めにかけてイスラーム化していくなかで、バミヤーンは初めて自分達とはまったく異なった文化にぶつかるということを経験するわけです。先ほど例をあげましたが、顔を削る時にどうしたのか、おそらくそれは目のある部分(コーランの中にも目のある部分というのは、その宗教の象徴的なものとする明確な規定がございますけれども)、それに照らして仏像の目の部分は削るということであったのではないのでしょうか。そして、おそらく削ったのはイスラーム教徒ではなくて、仏教徒であっただろうと思います。削った後はどうなったのかと言うと、戦争中の人為的な破壊を除いて、仏像とイスラームを信奉する人達は千数百年の間、共に住んできたのです。とはいえ人々は、仏像と共に共存したわけではないのです。それでは、どうしたのか。大きい仏像、大仏の方はお父さん、小さい方はお母さん、もしくは王、王妃というように大仏由来のストーリーを変えるんですね。これは非常に重要なことで、人間の知恵でありまして、非常に面白い点です。

もう一つの例があります。バミヤーンから西に少し行ったところに、タンギ・サラワクという遺跡がございます。そこに8世紀の仏塔が残っているのですが、基壇に一つの碑文が刻まれていて、その碑文はバクトリア文字という、アフガニスタンと中央アジアの独自の文字で刻まれたものです。文字を書いたのは仏塔を寄進した人達です。8世紀の終わりですから、イスラーム教徒と仏教徒が一緒にいた時代です。刻んだ人の一人はアラブ人、もう一人はトルコ系の人でありました。トルコ系の人を突厥だと考えれば、仏教を引き続いて信仰していたと考えられるでしょう。一方で、アラブ人はイスラーム教徒としてやって来ている。ところが、その2人が同時に自分達の繁栄と安全を願うとあって、その仏塔を寄進しています。それを碑文に残しているのです。これはまさに、歴史的に共存と共生をしていた立派な証拠でしょう。やはり彼らのなかで共に生きて行くことの知恵というのは、遺産としてちゃんと残されている。それを受け継ぐべき、また、ひき起こすべきだと思います。

それからもう一つは、1218年に書かれたアラブの地理学者が残したものです。ヤークートという人の文章が残っています。1218年というと、これはジンギスカンの蒙古軍がバミヤーンに押しかけてくる(1221年)わずか数年前です。そこ



には、「バーミヤーンには世界のどこにも比べるものの無い像が残っております。そのなかには立派な柱、立派な壁画が書かれたお堂が残っています。これこそバーミヤーンの誇りです」と書かれています。12、13世紀ですからイスラームの真ただ中ということになりますけれども、バーミヤーンの遺跡についてきちんとした、先ほどの星野さんの指摘ではありませんが、文化を敬する証拠としての文章が残されているのです。これは非常に大事なことではないでしょうか。こういう歴史を伝えるという場を、今バーミヤーンで若い世代と持たなければなりません。それこそが、平和の礎を築いていく第一歩だと思っています。

スライドをおみせします。私達が2009年に実施したのですが、バーミヤーンで若者が集まって、私達は初めて彼らと一緒に素晴らしい時を過ごしました(図48)。バーミヤーンの歴史を語れということで、講義をおこないました。この写真で語っているのは東京文化財研究所の山内和也さんですが、彼は私達がバーミヤーンでやっている修復事業についての情報を公開して、私たちのやっている仕事は何であるかということを知り人達に伝えていきます。ベールを被った方、4人の女性が出席してくれました。これは確実に新しい動きが始まっているということを示しているわけです。未だかつてこういう風景はありませんでした。



図 48.

その次を見てください(図49)。これは私が講義している時の写真ですが、私は何をやっているかと言うとバーミヤーンの壁画の説明をしているわけです。この壁画は既に消えてしまいましたが、石窟の天井に描かれた、言わば国際様式と呼んでもいい、様々な文化がそこで合流している壁画です。それを説明しているところです。彼らは初めて自分達のもっている文化というもの、いわば異文化と対話をしながら作ってきた文化なのだということを知り始めている。非常に質問が多くありました。こういう空間、そういう場ができてくるということが、いわば平和の礎を築く第一歩であろうと私は考えているわけです。異文化を理解するというのはそんなに簡単なことではありませんが、まず自分達の歴史に学ぶということ、そういう場をお互いに作りだすことが重要です。これは共にバーミヤーンで長い時間働いているからこそ、彼らに伝えるチャンスを得たということだと思います。こういうことは見逃すべきことではないだろうという気がいたします。



図 49.

(青木)

なるほど。自分たちの文化がどのようにつられてきたかということを経験的に見直し、それを次世代に伝えることで、平和構築に貢献できるということもあると思います。そういう意味では、日本がこれまで行ってきた文化遺産国際協力の情報公開は非常に大切です。前田先生がおっしゃる、そこまでもっていくための関係構築にも時間がかかるものですが、それこそが、文化遺産国際協力では非常に重要になってくると思います。

先ほど星野先生から「平和の配当」というお話がありました。「平和の配当」という考えからいうと、国際協力の枠組みの中で、ということが実際に考えられるでしょうか。

(星野)

どうしても「配当」というと即物的で物質的なものを考えてしまうのかもしれま

せんが、自分達の文化を享受できるというか、自由に大事にできるということでしょう。自由という言葉が出ましたが、自由を享受できるということが一番の平和の配当ということだろうと思います。

先ほどの、平和と文化の裏表ということに関して、ひと言だけ申し上げさせていただきます。私の専門の国際関係論、国際政治ですと、十年ほど前に、文明は衝突するか、という議論がございました。ボスニアなどの例をみてみますと、東西の境界が分裂し、そこにイスラームが入ってくる。そこに文明の断層のようなところがあって、そこが火種となって紛争になってしまったということがあったわけです。しかし、そういう断層部分の違う文明が重なり合うところが、必ず運命論的に、決定論的に紛争になるのかということ、そんなことはたぶんないと思いますし、前田先生のお話のなかでも共存した例、共生が実現した例があったということに、非常に勇気づけられることだと思います。なぜ文明が接合点のところで対立してしまうことがあるのかということ、一つはナショナリズムとか、民族主義とか、非常に強烈な気持ちと結び付くとそうになってしまうのだらうと思います。ナショナリズムというものを自由に平和を享受して自分の文化を楽しむのはいいのですが、非常に狭いナショナリズムに繋がってしまうことは、避けることを学ぶ必要があるのではないかと思います。

文化遺産というのは「人類共通の遺産」といわれます。つまり、それは自分の文化でありながら自分だけのものではなくて、世界にとっても重要なものであると感じる意味ではないでしょうか。ほかの文化であってもその人々のものだけではなく、我々がみても素晴らしいと感じさせる、そういう考えを持つことなのではないかなと思います。そういう考え方が醸成されるということも、平和の配当というふうに繋がって行くのかな、と思います。

(青木)

ありがとうございます。さて、実際としては、パーミヤーンもアンコール遺跡も、政府開発援助というようなかたちで、具体的な援助がおこなわれています。そのような公的な事業とは別に、草の根的な活動の必要性もございます。大石先生の方で、そのような活動について何かありましたら、お話しただけませんかでしょうか。

(大石)

草の根的に文化遺産を守るといっても、これはなかなか言葉のようにはいなくて、やはり大きな社会とか国とか世界とか、そういうものの援助がないとやっていけないのが現実だと思います。ただ、そこに住んでいる人々が自分達の方で、たとえば戦争や恐怖政治で失ったものを取り戻すということはとても大事なことで捉え、住んでいる人たちが自分達で積極的に行動していることはたくさんあります。少し写真をみながらお話ししたいと思います。

(図 50) この写真はラオスの織物ですが、織物は、ラオスのなかでとても文化的価値が高いものだと思います。織物は、地域によって、民族によってそれぞれ違うのですが、戦争中はこの織物のなかに戦闘機などを織ったりしていました。実物の織物を私はまだ見つけていないので、それをみた人の話とか写真でのことですが、自分達の生活とか周辺のことをかなり織物の中に織り込んでいます。私が写真で記録するように、人々は織物の中に記録しているのです。平和とか戦争なども記録しているのだと思いました。

ベトナムは長い戦争があって、なかなか文化というものは思うようにいかなかったのですが、戦争が終わってから、このようなベトナム文化のひとつである漆絵が蘇ってきたり、日常の暮らしの中でささやかなもの、この写真は5月の子供の日に飾るものなのですが、こういうものが戻ってきたりしました(図 47)。これも大事な人々の再生ではないかと思います。

(図 51) この写真はカンボジアですが、実はこの女性は孤児になりました。ポル・ポト時代に両親が殺されまして、彼女はまだ幼かったのですが、孤児になって親戚のところまで育てられており、自分で織物をして生活の足しにしているということです。実はポルポト時代というのは文化が殆ど否定されました。宗教も禁止です。上座部仏教に信心深い人達なので、小さな仏像を持っていただけで処刑されました。色も禁止です。全土黒一色。私が、ポルポト時代が終わって最初にカンボジアに行ったのは1980年でしたが、そのとき看板は殆どなく、とにかく色がありませんでした。人々が着ているのは黒です。ただ、タイとの流通が盛んになり始めた時でしたので、少し色がみられてはいま



したが、ほとんどが黒い世界で、私はその時に白黒で写真を撮っていました。先ほどお見せしたのはカラーですが、色というのは空にもありますし、木にも緑があります。でも人間が色を身につけていないと、なんて色が無いように見えるのか、というのが、私にとっては大きい体験でした。ですので、看板の絵にしる、画家が描く絵にしる、人間が着る服にしる、色を使わないとそこにある世界が大変暗く、重く、闇のようにみえてしまう、ということをそこで体験しました。それが1980年の7月のことです。

1981年、82年と、それ以降もほとんど毎年のように訪ねながら、見てきたのは色でした。色が少しずつ少しずつ蘇ってくるなかで、社会も少しずつ少しずつ復興し、人々の体力も少しずつ元気になっていって、文化も蘇ってきました。さきほど石澤先生がおっしゃいましたが、アンコール・ワットは国旗にも当時描かれていました。しかし、人々の心は、遺跡どころではない、アンコール・ワットどころではないという雰囲気がありました。それも徐々に徐々に戻っていき、アンコール遺跡という言葉が口から出る回数も増えていったというような印象を受けました。

(図52, 53, 54)この写真はプリア・ヴィヒア寺院です。先ほど写真を1枚紹介しましたが、この後の3枚はプリア・ヴィヒア寺院での写真です。ここはタイとの国境にあるために、タイとカンボジアが領土紛争で余念がないというのが現実です。プリア・ヴィヒア寺院のなかに、カンボジア軍がタイの方へ向け銃を構えていて、そのなかには観光客がちらほらいます。観光客以外にいるのは兵隊とその家族です。子供の姿はありますが、兵隊の子供たちです。それくらい緊迫した状況がありました。



図 50.



図 51.



図 52.



図 53.



図 54.

この寺院は山の頂上に建っています。そこに行くためには山を登らないと行かれないわけです。私はこの頂から景色を眺めているいろいろ感じたことがあります。プリア・ヴィヒア寺院は世界遺産になりました。世界遺産になったことで世界中が知ることになり、世界中の人達が注目することになり、注目することで紛争がしにくくなっている、という現実があります。紛争がしにくくなっているということが、やがて武器ではなく話し合いで解決しよう、という方向に動いていくのではないかと期待しています。やはり文化を水戸黄門ではないですけども、「見ろ」と掲げることにより、紛争とか戦争にならないようにできる策の一つになるのではないかと、ここで強く感じました。

私も撮影して皆さんに伝える。そして伝えられた人は知る。知ったからには行動を起こしてもらおう。行動はひとりひとり皆違いますので、それぞれのやり方でそれぞれの時間とか経済的状況のなかで、工夫しながらやっていただくこと、これが大事なのではないかと思えます。とにかく私の役割は知ってもらうことだ、と思えますが、いかがでしょうか。

(青木)

ありがとうございました。実は、上智大学でアンコール遺跡を研究されている丸井雅子先生にカンボジアをご案内いただいた際に、文化遺産の保護だけでなく、住民の為に染織品などを復興して生活の糧にする必要があるという話を聞きました。そのように住んでいる人たちを巻き込んで保護していく方法もあるかと思いました。

(前田)

アフガニスタンのことで緊急にお願いしたいことがあり、この場をかりて申し上げたいと思います。ご存じの通り、日本政府はアフガニスタンに対して5年間で4千5百億円の支援を決定しています。2010年6月16日にはカルザイ大統領がやってきます。日本はアフガニスタンに対して民生を中心とした総合的な支援を決定しております。これは正しい方向だと私も思いますが、そこではやはり文化についての支援の表明がとても見えにくい。現在、私達があれだけの仕事ができるのは、ユネスコの日本信託基金を政府が拠出してきているからです。また、民間の支援、日本ユネスコ協会が民間から資金を作って私達の宿舎などを建設してくれたからです。それで活動ができていますが、今度の大きな支援のなかに、文化に関する支援をパッケージする姿勢が見えにくいという点がきわめて残念なことだと思っています。

最初に私がおみせしましたように、戦争直後の貧しい時代に彼等は生活の再建と同時に文化の復興もセットで考えてきている。ここはやはり大事なところで、我々がアフガニスタン支援をする場合に、全支援額の1%でいいので、文化支援というものをきちんとアフガニスタン支援なかにパッケージとして組み込んで欲しいということをこの機会に要望しておきたいと思えます。これは現場からの切実な叫びでありまして、統合的な策のなかに、文化を落とさないでいただきたいと考えます。そうすることで、民生支援を包みながらの、星野先生の言葉でいえば深層的な力が発揮されるのだらうと私は思います。どうかそこは政府にきちんと受け取っていただきたいと要望したいと思えます。





(青木)

ありがとうございます。前田先生の方から重要な指摘がございました。これから日本政府はアフガニスタンに対し総合的な支援をしていきますので、そのなかで文化のことにきちっと位置付けをしてほしいということでもあります。

このほかに、そういったお願いが多々あるかもしれませんが、このコンソーシアムというのは、オールジャパンで海外の国際協力に対して活動していこうというところなんです。これは平山先生の文化財赤十字構想からおきているわけです。私達は日本の歴史で、廃仏毀釈などを経験してきました。その悪戦苦闘があったからこそ、現在の文化財保護制度があり、様々な保存制度があるわけです。これは私が勝手に思っていることですが、平山先生はご自分の戦争体験、そしてシルクロードに対する思いなど、様々なことがあってこの赤十字構想のような、グローバル的なことを考えられたのではと思います。もしかしたら、岡倉天心から受け継ぐDNAのようなものがそこには影響していたのかもしれませんが。私たちは、文化遺産をどう守るか、という平山先生の構想と築かれてきたものをこれからも大事にしていかなければと思います。コンソーシアムも、皆さんが広く参加できるプラットフォームとして是非活動していきたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願い致します。パネリストの先生方をはじめ、本日ご参加くださいました皆様、本当にありがとうございました。



文化遺産国際協力コンソーシアム 国際シンポジウム報告書
「文化遺産保護は平和の礎をつくる」

2011年3月発行

文化遺産国際協力コンソーシアム
110-8713 東京都台東区上野公園 13-43
(独) 国立文化財機構 東京文化財研究所
Tel. 03-3238-4841 Fax. 03-3238-4027